三重県埋蔵文化財調査報告１０４

一般県道田丸停車場斎明線道路改良事業に伴う

波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告

—度会郡玉城町下田辺—

１９９２・３

三重県埋蔵文化財センター

序

広大な面積のほ場整備事業や道路改良及び河川改修などの公共事業、また民間企業による開発事業に伴う埋蔵文化財保護の問題は年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、文化財保護行政の一環として、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。今後ともなお一層、関係者への埋蔵文化財の理解と協力を深めていきたいと考えておりますので広く県民の皆様方の理解と協力をお願いする次第であります。

ここに報告する度会郡玉城町所在の波瀬Ｂ遺跡は、一般地方道田丸停車場斎明線道路改良事業の施行に先立ち、事前の協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存されたものです。調査の結果、弥生時代中期から安土桃山時代に至るまでの人々の生活のあとが明らかになりました。特に弥生時代中期後葉の方形周溝墓からは数々の遺物が発見され、南勢地域における弥生時代中期の文化を考えるうえで貴重な結果が得られました。これらの祖先の残した歴史遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上発展の基礎として活用していかなければなりません。

調査にあたっては、県土木部道路建設課、伊勢土木事務所、玉城町をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら、記して深く感謝の意を表します。

平成４年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　中　林　昭　一

例　言

1．本書は、三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した一般地方道田丸停車場斎明線道路改良事業に伴う度会郡玉城町下田辺に所在する波瀬Ｂ遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2．調査は下記の体制で行った。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　主事　上村安生
3．調査にあたっては県道路建設課、伊勢土木事務所、玉城町ならびに地元各位の方々に協力を得た。
4．発掘調査後の出土遺物の整理は上記担当者の他、管理指導課が行った。
5．本書の執筆・編集は、上村が担当した。
6．当遺跡の位置は国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北を用いた。
7．本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。
8．写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。
9．本書で用いた遺構表示略記号は下記による。
　ＳＨ；竪穴住居　ＳＢ；掘立柱建物　ＳＫ；土坑
　ＳＤ；溝　ＳＡ；塀　ＳＥ；井戸

本　文　目　次

Ⅰ．前言 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ．位置と歴史的環境…… 2
Ⅲ．遺構…… 5
　1　弥生時代の遺構…… 5
　2　奈良時代の遺構…… 6
　3　平安時代の遺構…… 9
　4　室町時代以降の遺構…… 9
Ⅳ．遺物…… 12
　1　旧石器・縄文時代の遺物…… 12
　2　弥生時代の遺物…… 12
　3　奈良時代の遺物…… 15
　4　平安時代の遺物…… 17
　5　室町時代以降の遺物…… 21
Ⅴ．結語…… 25
　1　遺構について…… 25
　2　遺物について…… 27
　3　まとめ…… 29

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　遺跡地形図…… 3
第３図　調査区位置図…… 4
第４図　ＳＸ１土器３出土状況図…… 5
第５図　ＳＸ３土器10出土状況図…… 6
第６図　ＳＸ３土器９出土状況図…… 6
第７図　遺構平面図・土層断面図…… 7～8
第８図　ＳＢ42・ＳＢ43・ＳＢ44実測図…… 9
第９図　ＳＢ48・ＳＢ498・ＳＢ50実測図…… 10
第10図　ＳＢ51実測図…… 11
第11図　出土土器実測図（１）…… 13
第12図　出土土器実測図（２）…… 14
第13図　出土土器実測図（３）…… 16
第14図　出土土器実測図（４）…… 18
第15図　出土土器実測図（５）…… 19
第16図　出土土器実測図（６）…… 20
第17図　出土土器実測図（７）…… 22
第18図　出土土器実測図（８）…… 23

図版目次

ＰＬ１　遺跡全景、ＳＸ１
ＰＬ２　ＳＸ１・ＳＸ３・ＳＥ28
　　遺物出土状況
ＰＬ３　調査区南半景、ＳＢ42・43・44
ＰＬ４　出土遺物
ＰＬ５　出土遺物
ＰＬ６　出土遺物
ＰＬ７　出土遺物
ＰＬ８　出土遺物

表目次

第１図　掘立柱建物・塀規模表…… 31
第２図　出土遺物観察表（１）…… 32
第３図　出土遺物観察表（２）…… 33
第４図　出土遺物観察表（３）…… 34
第５図　出土遺物観察表（４）…… 35
第６図　出土遺物観察表（５）…… 36

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関して、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてきている。

こうした中で三重県土木部道路建設課より、一般県道田丸停車場斎明線道路改良事業の事業計画の連絡を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、平成２年度に事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業予定地周辺には周知の遺跡として波瀬Ｂ遺跡（旧称田丸城西遺跡）が存在し、事業地内にも遺跡が拡がっていることが判明した。

そこで平成３年12月に三重県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施したところ、1,600㎡について遺構・遺物が確認された。

波瀬Ｂ遺跡の取り扱いについては、その保存に努めるように県土木部・伊勢土木事務所と協議を重ねてきた。しかし、この道路が地域住民の生活道路として必要であるため、やむなく事前の調査を実施することになった。

調査は県土木部の執行委任を受けて平成３年12月18日から平成４年３月10日まで実施した。

2．調査の方法と経過

現況は畑及び山林である。調査は、最初に遺構面に影響のない範囲での表土除去を重機で行った。
小地区の設定にあたっては、４ｍ×４ｍを基準として北から南へアルファベット、西から東に数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

調査日誌（抄）

月　日	内容
12　18・19	調査区の草刈り、立木伐採。
12　24～26	調査区表土を重機にて除去。
1．6	発掘資材搬入。
1．7	小地区設定。西側より遺構検出開始。
1．8	Ｅ列まで遺構検出終了。調査開始前まで建っていた家によりかなり攪乱されているものの掘立柱建物確認。
1.14	Ｅ列西端の方形周溝墓ＳＸ１北周溝より弥生時代中期後葉の土器出土。
1.20	測量基準点設定。
1.21	ＳＫ５実測及び写真撮影後、重複するＳＥ６を掘る。
1.22	ＳＫ７・８実測及び写真撮影後、重複するＳＫ９を掘る。
1.27	Ｋ列西端のＳＥ13掘り下げ。
1.31	調査区西側の低い畑の部分調査終了。
2．3	調査区東側の高い畑の部分調査開始。
2．6	ＳＸ２検出、掘り下げ。
2.12	ＳＸ３北周溝より弥生時代中期後葉の細頸壺出土。
2.13	ＳＥ28掘り下げ開始。10世紀後半～11世紀後半の土師器杯・皿・鍋、黒色土器椀、灰釉陶器椀が出土。
2.17	ＳＥ13・ＳＫ14の土層断面実測。南端部遺構検出。
2.19	南端でＳＫ36を検出する。規模は南北10.0ｍ、東西 4.6ｍと大きい。
2.20・21	ＳＫ24・27・30・31、ＳＤ20・23・29ＳＸ３の土層断面実測。
2.24	ＳＸ１遺物出土状況実測。東端部遺構検出。
2.25	山林の部分調査開始。ＳＸ１遺物出土状況実測。
2.26	ＳＸ３遺物出土状況実測。南東端部でＳＤ38・39検出。
2.27	遺構掘削終了。ＳＸ１・３実測。遺構掘削終了。
2.28・29	遺構写真撮影。
3．6	調査区全体の掃除。
3.10	調査区全体の空中写真測量実施。調査区西側の壁面土層実測。調査終了。

Ⅱ．位置と歴史的環境

南伊勢地方には櫛田川と宮川という、二大河川がある。どちらも、有数の多雨地帯で知られる大台ヶ原山の最高峰日出ヶ岳をはじめ、県境となっている台高山脈の山々をその水源地としており、中流域では河岸段丘が連続的に発達し、山地を縫うようにして流れている。山間部から抜け出た下流域では、幾度も流れを変え広大な氾濫平野を形成している。

玉城町は、この二大河川にはさまれた地域にあり、町域のほぼ中央部をさらに外城田川という中小河川が貫流している。

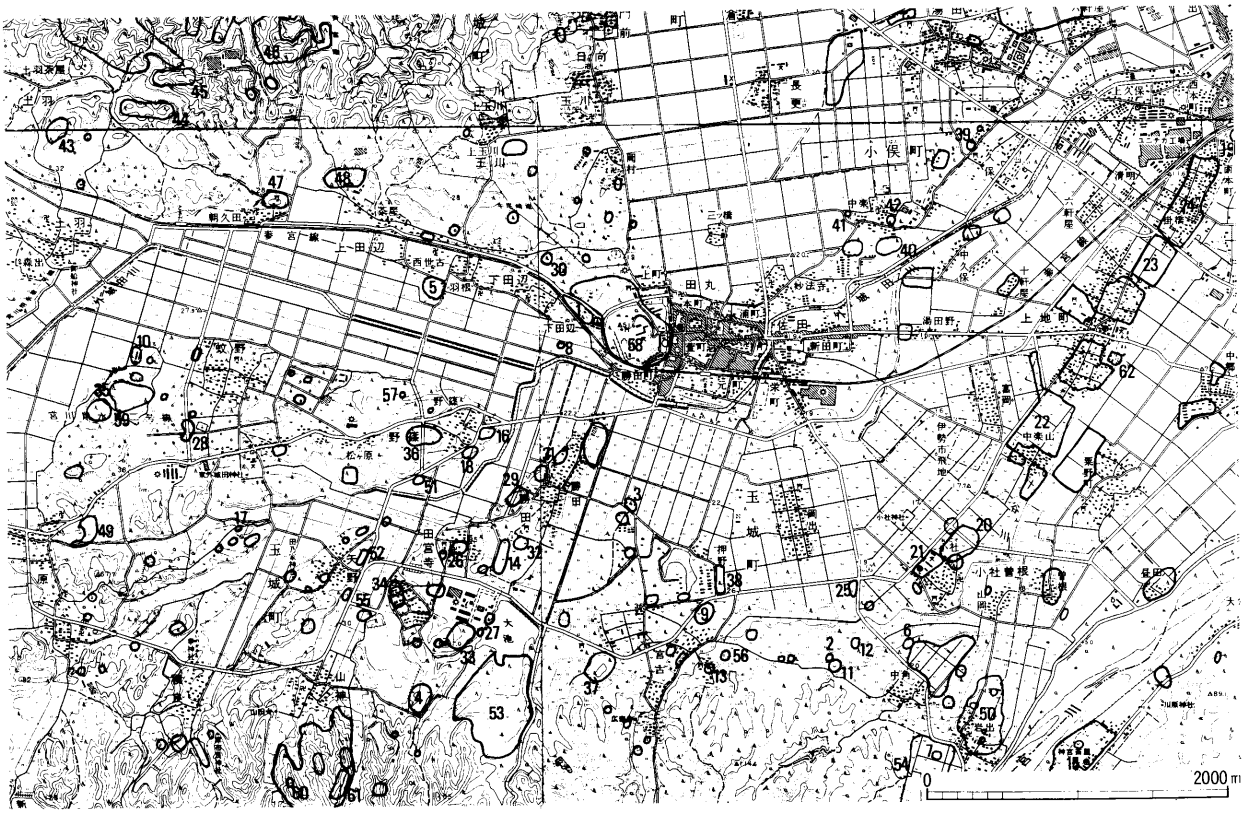
波瀬Ｂ遺跡(1)は、外城田川によって形成された氾濫平野を眼下に見下ろす低丘陵上の南辺部に立地する。標高は26ｍ前後で、眼下の現水田面との比高差は５ｍをはかる。行政上は、度会郡玉城町大字下田辺字波瀬に属する。

当地域には、上述したように低丘陵が発達し、旧石器時代以来、多くの人々が生活を営んでおり、数多くの遺跡が確認されている。以下、周辺の歴史的環境について時代を追ってその概略を述べる。

まず、旧石器時代の遺跡であるが、当地域は県下で最も分布が濃密な地域として知られている。その内容については表採資料が中心であるが、かなり明らかになってきている。なかでも、上地山遺跡(2)は昭和58年と59年に発掘調査が行われており、国府型ナイフ形石器をはじめ、チャート製の小型ナイフ形石器、舟底形石器、掻器、楔形石器、石核等が出土している[1]。東伸遺跡(3)では、ナイフ形石器、細石刃核、掻器、石核等がまとまって表採されている[2]。この他、仲野遺跡(4)、西世古遺跡(5)、アレキリ遺跡(6)、角垣内遺跡(7)、ミドロ遺跡(8)がある[3]。

これらの遺跡は、ミドロ遺跡を除き、低平な丘陵や段丘が平野部に突き出た末端部に立地するという特徴が指摘されている[4]。

縄文時代の遺跡は、当地域周辺においては石鏃や剝片が出土した寺起遺跡(9)、えなど遺跡(10)、狼谷遺跡(11)、明豆遺跡(12)、東村遺跡(13)が前方に低地を控える丘陵端部に分散的にみられるが、いずれも少量の土器と石器が確認されている。時期的に



第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院　松阪・明野・国束山・伊勢　１：25,000）

は後期が中心となるようであるが[5]、詳細は明らかではない。恐らく、キャンプサイト的な性格の遺跡と推定されている。また、上の山遺跡(14)では、晩期の突帯文土器が出土している[6]。これに対して、宮川を渡った右岸段丘中位面上には、岩偶の出土で著名となった佐八藤波遺跡(15)がある。後期を中心とした土器がかなりまとまって採集されており、石器も多数の石鏃や、スクレイパー、石斧、石錐、石錘、石棒等が発見されている。後期を中心とした右岸側の拠点的遺跡と考えられる[7]。

弥生時代の遺跡は、前・中期については稀薄な状況である。前期の遺跡としては、上の山遺跡、仲垣内遺跡(16)、西世古遺跡、狼谷遺跡、山殿西遺跡(17)がある。上の山遺跡では新段階に属する竪穴住居が検出され、壺、甕、サヌカイトの剝片が出土しており[8]、仲垣内遺跡では新段階に属する壺、甕等が土坑から出土している[9]。その他の遺跡についても新段階に属するものと思われる。中期の遺跡では、上の山遺跡で後半の方形周溝墓が2基検出され、細頸壺が出土している[10]。この他には、月よべ遺跡(18)、離宮山遺跡(19)、小社遺跡(20)で後半の土器が発見されているにすぎない[11]。しかし、後期になると遺跡は急激に増加し、南勢地方でも屈指の大遺跡が左岸段丘中位面にほぼ帯状に形成されている。南からウエ松遺跡(21)、小社遺跡、中楽山遺跡(22)、野垣内遺跡(23)、掛橋遺跡(24)等である。中でも発掘調査が実施された中楽山、野垣内の各遺跡では、竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、これに伴う土器は、南勢地方の欠山期から古式土師器への編年上の標準資料となっている[12]。眼下に広大な沖積地を見下ろす中位段丘上に安定的な集落形成が行われたことが推定される。この他に、時期は特定できないが杉山遺跡(25)、田宮寺遺跡(26)、大池遺跡(27)、さみだれ遺跡(28)では石包丁が採集されており、付近の低丘

第2図　遺跡地形図（1：5,000）

陵上に点々と住居の跡が残されている。さらに、当遺跡の南1kmにある勝田遺跡(29)では、弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居が検出されている[13]。古墳時代にはいると前代に左岸段丘上で盛況した大規模な集落は一斉に解体し、拡散していったと思われる[14]が、集落跡の調査例はほとんどなく、具体相は不明である。こういった状況のなかで、古墳群の形成は5世紀の前半以降活発な展開をみせている[15]。4世紀に遡るものとしては小社遺跡採集の石釧[16]と下田辺茶臼山古墳(30)の台付壺[17]が注目されているが、いずれも偶然の出土によるものである。

玉城町南部の古墳の分布については、八柱神社古墳群(31)、上の山古墳群(32)、前岡古墳群(33)、空池古墳群(34)が分布する田宮寺周辺地域、ぼうず山A・B古墳群(35)、正来寺古墳群(36)が分布する蚊野丘陵周辺地域、矢塚古墳群(37)、鉄砲塚古墳群(38)が分布する宮古地域に大別される。さらに外城田川左岸地域には、全長33.5mの前方後円墳野田古墳(39)、茶臼山塚古墳群(40)、塚田古墳(41)、豆塚古墳群(42)が分布する他、外城田川と櫛田川に挟まれた玉城丘陵には権現山2号墳(43)、中山古墳群(44)、ゆぶみ古墳群(45)、斎宮池古墳群(46)、朝久田古墳群(47)、上田辺古墳群(48)がある。

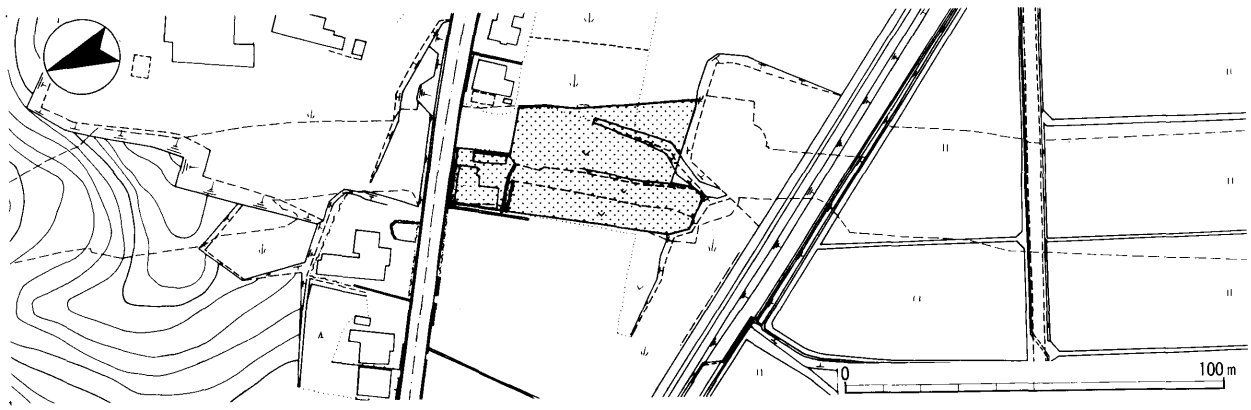
飛鳥・奈良時代の遺跡としては原古窯址群(49)がある。全10基のうち、6号窯と7号窯が調査されており、7世紀末から8世紀初頭の杯、長頸壺等が出土している[18]。従って、当然これらの生産に直接従事した工人、或いは生産を招来する背景となった勢力に関連する遺跡が、周辺に存在することが予想されるが、現時点では明らかでない。

平安時代の遺跡としては、斎王参宮の際の離宮である離宮院跡(19)がある。発掘調査では八脚門址が検出されている[19]。この他、岩出遺跡(50)[20]、上の山遺跡、野垣内遺跡、赤垣内遺跡(51)、小ばし遺跡(52)等があげられる。野垣内遺跡では掘立柱建物5棟の他、同時期の竪穴住居も見つかっており[21]、当時の一般庶民の生活の一端をみることができる。また、上の山遺跡では平安時代中期の総柱建物を含む掘立柱建物2棟が見つかっている[22]。さらに、赤垣内遺跡では平安時代末頃の総柱建物を含む掘立柱建物が検出され[23]、小ばし遺跡では土製支脚が出土している[24]。

中世以降の遺跡には、掘立柱建物や井戸、区画溝が検出され屋敷地の変遷が考察されている楠ノ木遺跡(53)[25]掘立柱建物や井戸、溝、土坑を多数検出している蚊山遺跡(54)[26]、掘立柱建物や土坑を検出している上の山遺跡がある[27]他、古くからの開発、開墾に伴って遺物が出土している遺跡にヒムロ遺跡(55)、平内山遺跡(56)、鳥取山遺跡(57)等がある。

中世城館には田丸城址(58)、坊主山館址(59)、山神城址(60)、山上東城址(61)、岩出城址(50)、寺山城址(62)がある。田丸城址は延元元年(1336)に北畠親房、顕信父子が築城して以来、南朝方の拠点となり、南北両朝合一後も北畠国司の支配下に置かれた。永禄12年(1596)に織田信長の大河内城攻めの際の和議によって、次男信雄が城主となり、以後、堀、石垣、土塁を備えた近世的平山城として生まれ変わる。江戸時代には、和歌山藩家老の久野家が城主となり、八代続いて明治の廃城を迎える[28]。

以上、波瀬B遺跡周辺の歴史的環境について、考古学的成果を中心に述べた。当地域が旧石器時代以来、多様な歴史を展開してきたことが分かるであろう。



第3図　調査区位置図（1：2,000）

Ⅲ. 遺　　構

遺跡の層序は基本的に表土直下が橙褐色土の地山となっている。表土の厚さは20～30cmである。但し、調査区中央西側のＧ列からＪ列にかけての約200㎡は整地がなされている。遺物は表土に若干含まれるが、明確な遺物包含層は見られない。これは開墾により削平されているためである。

検出された遺構は、竪穴住居２、方形周溝墓３、掘立柱建物９、塀１、土坑23、溝10、井戸３である。

１．弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、方形周溝墓と土坑があるがいずれも中期後葉のものである。

Ａ．方形周溝墓

ＳＸ１　調査区西のＥ列からＦ列に位置する。東側を除く３方向で周溝が検出されている。北周溝は一部を検出したのみで長さ2.1ｍ、幅0.8ｍ、深さは10～20cmと浅い。細頸壺(2)、台付無頸壺(3) が出土している。東周溝は長さ6.4ｍ、幅1.0ｍ、深さは10～20cmである。南側をＳＫ４に切られている。甕(6・7)、蓋(5) が出土している。南周溝は整地土により攪乱され、更にＳＫ８・９に切られている。検出した長さは 5.0ｍ、幅1.1ｍ、深さ20～30cmである。二方向に穿孔がある小型壺(4) 、太頸の短頸壺(1) が出土している。いずれの周溝も埋土は暗褐色土である。

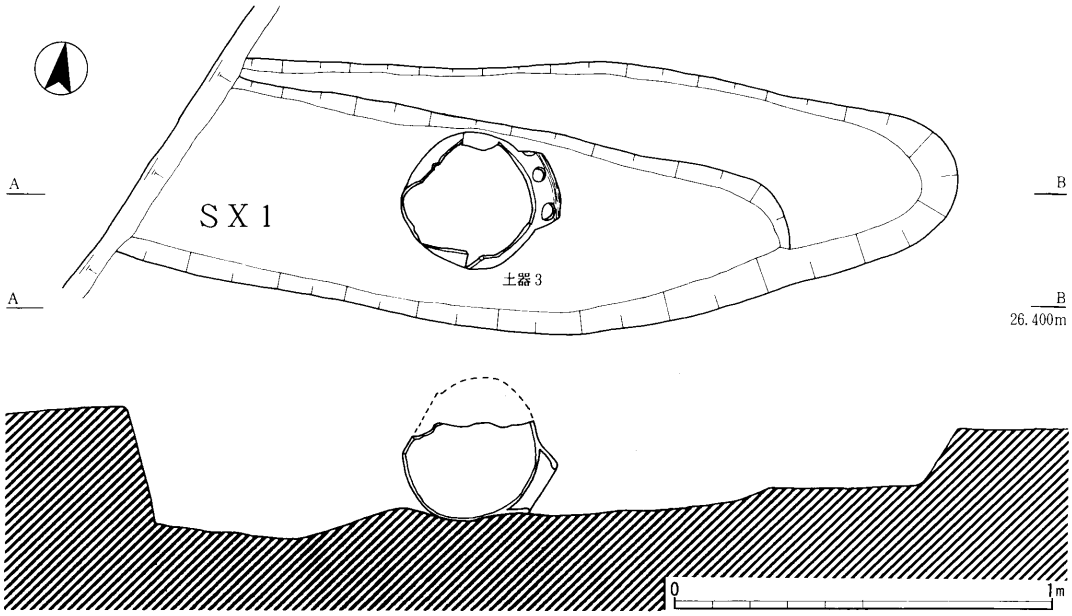
ＳＸ２　ＳＸ１のすぐ東に位置する。ＳＫ21・22に切られ、さらに削平を受けているため周溝の一部を検出したのみである。検出した周溝は北で3.0ｍ、東で8.5ｍ、幅は0.3～0.9ｍ、深さは10cm前後で、周溝の北東コーナーは繋がっている。埋土は暗褐色土で細頸壺(8) が出土している。

ＳＸ３　ＳＸ２のすぐ南に位置する。北西コーナーは土坑群及びＳＤ29に切られ、南側は削平されている。北周溝は長さ7.0ｍ、幅1.0ｍ、深さ40cm前後、西周溝もほぼ同じ規模である。周溝の北東コーナーは削平を受けているが、繋がっているようである。埋土は暗褐色土で細頸壺(9) 、広口壺(10)、柱状の脚台部(11)が出土している。

Ｂ．土坑

ＳＫ32　調査区の中央に位置する。西側をＳＤ20に切られているため、確認できた規模は長軸 1.5ｍ、短軸1.0ｍ、深さは40cm前後である。恐らく、楕円形の土坑であろう。埋土は黒褐色土で細頸壺(15 ・16) が出土している。

ＳＫ41　ＳＫ32の西7ｍで検出した。削平と攪乱を受けており、規模は長辺1.5ｍ前後、幅0.9ｍ、深



第４図　ＳＸ１土器３出土状況図（１：20）

さ7㎝である。埋土は暗褐色土と黄褐色土の混入土で、細頸壺(12 ～14) が出土している。

2．奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、竪穴住居、土坑、井戸がある。いずれも、奈良時代末の遺構である。

A．竪穴住居

ＳＨ25　調査区中央北よりに位置する。土坑群と重複し、さらに西をＳＤ20・23に切られ、南をＳＤ29に切られている。平面形態は方形で確認できた規模は長辺4.5ｍ、短辺3.5ｍ,深さ30㎝前後である。長軸方向は、N28°Ｅで、焼土と粘土の痕跡から、南壁にカマドがあったと想定される。埋土は暗褐色土で、土師器杯・皿・甕が出土している。

ＳＨ34　ＳＨ25の南11ｍに位置する。平面形態は隅丸長方形で、長辺3.6ｍ、短辺2.5ｍ、深さ10㎝前後である。長軸方向はＥ26°Ｓで、北東隅付近に僅かに焼土が見られたが、ＳＫ33に切られておりカマドであったかどうか不明である。埋土は暗茶褐色で土師器杯・皿・甕が出土している他、混入であろうが、石鏃(21)も出土している。

B．土坑

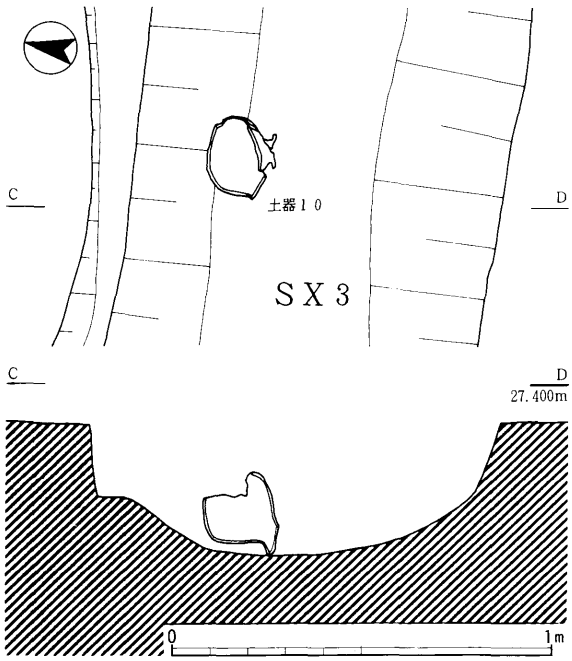
ＳＫ24　西をＳＤ20・23に切られ、南をＳＤ29に切られている。長辺4.0ｍ、短辺3.0ｍ、深さ10㎝前後、暗褐色土の埋土を掘り下げるとさらにＳＨ25が検出された。出土遺物には、土師器杯(33 ～38) ・台付杯(39)・皿(40)・長胴甕(42)・小型甕(41)・甑、須恵器杯・甕・長頸壺、土錘(43)、製塩土器がある。

ＳＫ26　ＳＨ25を掘り下げ検出した。一辺 1.2ｍの隅丸方形の土坑で、深さは20㎝前後である。埋土は暗褐色土で、土師器甑、須恵器杯・甕が少量出土している。

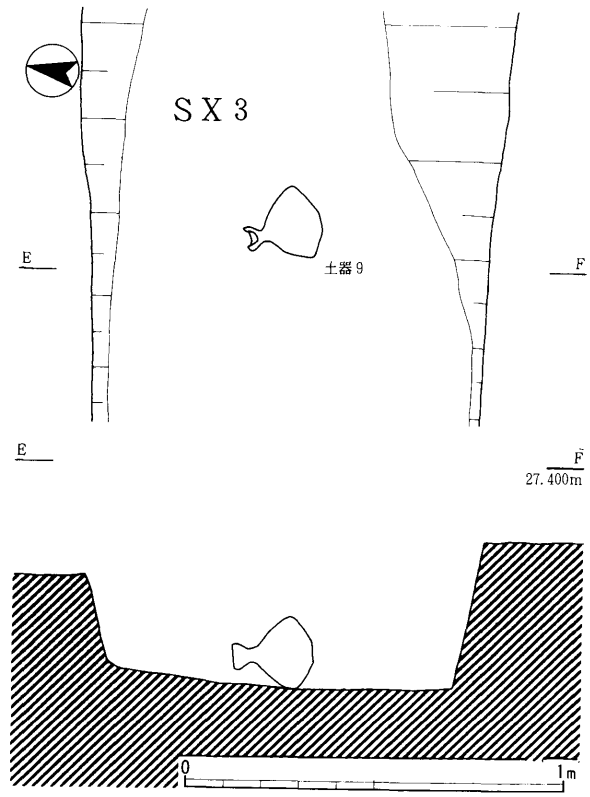
ＳＫ27　西側をＳＤ23に切られている。長辺2.0ｍ、短辺0.5ｍを確認している。深さは10～15㎝である。埋土は暗茶褐色土で、土師器杯・甕、須恵器高杯(32)が出土している。

ＳＫ31　ＳＤ29の南側で検出した。西をＳＤ20に北をＳＤ29に切られ、規模は不明だが、南北に長い楕円形の土坑である。深さは10㎝前後と浅い。埋土は暗褐色土に黄褐色土がブロック状に混入している。出土遺物には土師器杯(22)・台付椀・皿(23 ～27) ・長胴甕(28)・小型甕(29)・鍋(30)、須恵器杯蓋(31)、製塩土器がある。

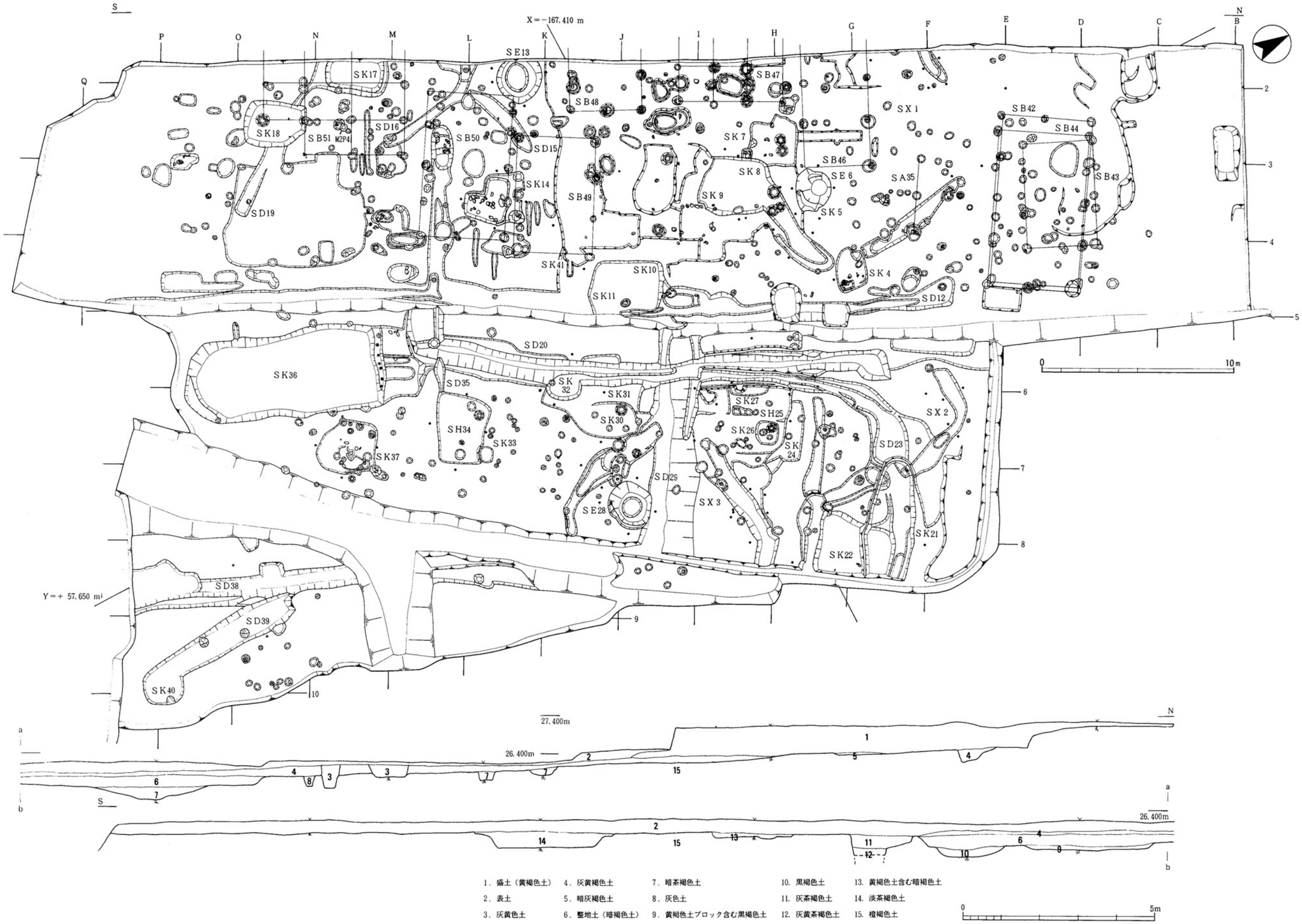
ＳＫ30　ＳＫ31を掘り下げ検出した。埋土は暗褐色土で、土師器杯・皿・甕、製塩土器が出土している。



第５図　ＳＸ３土器10出土状況図（１：20)



第６図　ＳＸ３土器９出土状況図（１：20)



1．盛土（黄褐色土）　4．灰黄褐色土　7．暗茶褐色土　10．黒褐色土　13．黄褐色土含む暗褐色土
2．表土　5．暗灰褐色土　8．灰色土　11．灰茶褐色土　14．淡茶褐色土
3．灰黄色土　6．整地土（暗褐色土）　9．黄褐色土ブロック含む黒褐色土　12．灰黄茶褐色土　15．橙褐色土

第７図　遺構平面図（１：200）　土層断面図（１：100）

3．平安時代の遺構

平安時代の遺構には、多量の遺物が出土した平安時代後期の井戸ＳＥ28がある。

ＳＥ28　東西2.4、南北2.0ｍの楕円形の井戸である。検出面より0.9ｍまでの埋土は灰茶褐色粘質土である。そして、ここまで掘り下げた段階で、中央に厚さ2～3㎝の鉄分が、直径1.0ｍの円形にまわることが確認できた。井戸枠に鉄分が付着し固まったものと想定される。出土遺物は、井戸枠掘形の遺物（遺物実測図４）・井戸枠内の遺物（遺物実測図５）・井戸枠検出前の遺物（遺物実測図６）に分かれ、土師器杯・皿・鍋、黒色土器椀、灰釉陶器椀・広口瓶、製塩土器がある。

4．室町時代以降の遺構

今回の調査では、この時期の遺構が最も多く、大半は16世紀代の遺構である。

Ａ．掘立柱建物

掘立柱建物は９棟が確認された。建物の時期決定は柱掘形内の遺物によるが、すべて15世紀末から16世紀代の建物と考えられる。

建物の規模については、別表の掘立柱建物・塀一覧表にまとめた。建物はその規模、形態によって総柱建物と４間×２間あるいは３間×２間の東西棟の建物という違いが認められ、さらに、棟方向によって分けられる。以下、その概略を述べる。

ＳＢ42・44・50　ＳＢ42・44は調査区の北端で検出した。前後関係はＳＢ44→ＳＢ42である。ＳＢ44とＳＢ42は梁行が若干違うものの、共に４間×２間の建物で棟方向もＥ32°Ｓで同じである。建て替えたものと考えらえる。柱掘形は共に径30㎝前後の円形で、底には偏平な川原石の根石を持つ。ＳＢ50はＳＢ44の南約30ｍに位置している。桁行、梁行共に

第８図　ＳＢ42・ＳＢ43・ＳＢ44実測図（１：100）

ＳＢ42・44より小さくなるものの、４間×２間の建物で西側妻柱列はＳＢ44と揃っている。

ＳＢ47・51　この２棟は棟方向が同じＥ27°Ｓの建物で、総柱建物である。どちらも建物は西へ続き検出したのは一部であり、南北は３間、東西は不明である。柱穴は20cm前後と浅く、ＳＢ47は根石をもつ。ＳＢ51は建物内に土坑ＳＫ17がみられる。ちょうど、柱掘形がある位置にもかかわらず、柱掘形は確認できなかったのでこの土坑は建物より新しいか、または、建物に付随するものと考えられるがどちらとも判断しがたい。

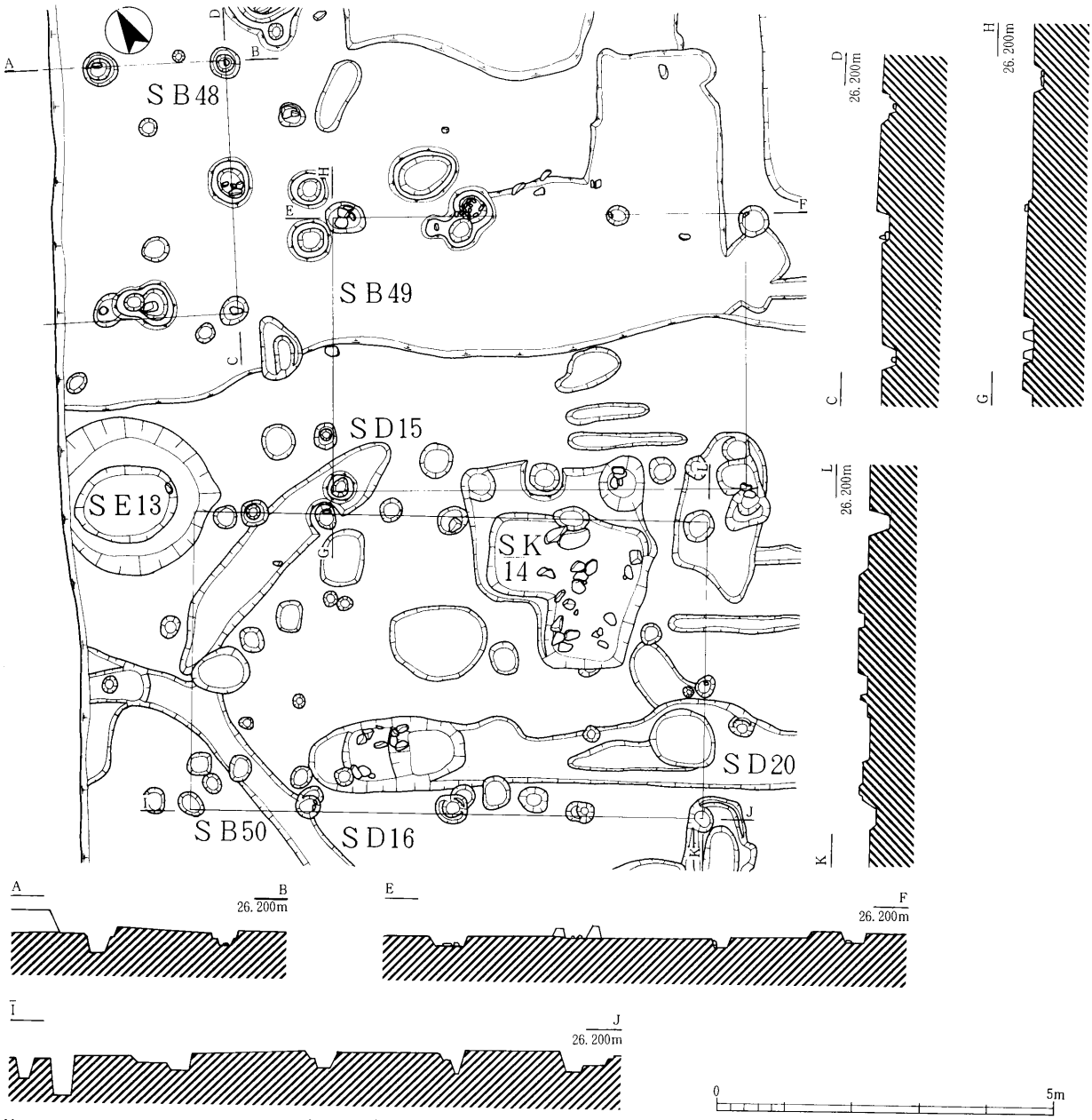
ＳＢ43・46・48・49　これらの建物はそれぞれ棟方向が他の建物とは揃わない建物である。ＳＢ43・49は３間×２間の東西棟の建物であるが、他の２棟はさらに調査区の西へと続く建物で規模は不明である。柱掘形はいずれの建物も20～30cmの円形で、根石をもつ。

Ｂ．塀

ＳＡ45　ＳＢ42・44の南約４ｍで２間分を検出した。柱掘形からは遺物が出土していないため時期決定はしがたいが、ＳＢ42・44と方向が同じなので、どちらかに伴うものと考えられる。

Ｃ．土坑

土坑には15世紀前半から16世紀後半のものがある



第９図　ＳＢ48・ＳＢ49・ＳＢ50実測図（１：100）

が大半は16世紀代に入るものである。出土遺物は土師器皿・鍋・羽釜の他、陶器では縁釉小皿・天目茶碗・擂鉢などがある。

ＳＫ37　台形に近い不整形な土坑である。埋土は暗灰茶褐色土で焼土と粘土の混入土が東壁よりに見られた。ただし、土坑の底や壁面には火をうけた痕跡は見られない。土師器皿・鍋・羽釜が少量出土している。15世紀前半の遺構である。

ＳＫ14　ＳＢ50と重複するが、これより新しい土坑である。埋土は暗褐色土で焼土を含むが、ＳＫ37と同様、土坑の底や壁面には火をうけた痕跡は見られない。土師器皿・鍋が少量出土している。16世紀前半の遺構である。

ＳＫ７・８・９　重複する土坑で前後関係は古い方からＳＫ９→ＳＫ８→ＳＫ７である。いずれも、整地土を掘り込んでいる。これらの土坑は16世紀代の遺構であるので、整地がなされたのは、16世紀代以前と考えられる。

ＳＫ21　調査区の北東隅に位置する細長い楕円状の土坑である。埋土は、赤褐色土と灰褐色土の混入土でしまりのない土である。溝ＳＤ23・土坑ＳＫ22より新しい遺構である。土師器皿・鍋・羽釜、天目茶椀、器種不明の土師器が出土している。16世紀後半の遺構である。

ＳＫ36　調査区の南端で検出した土坑である。その規模は長辺10.0ｍ、短辺4.0ｍと大きな土坑である。水溜とか特殊な用途の土坑かもしれないが、遺構の性格は不明である。暗灰茶褐色土の埋土からは、土師器皿・鍋、陶器甕・おろし皿、天目茶椀、青磁椀、平瓦が出土している。15世紀末の遺構である。

Ｄ．溝

10条検出されている溝のうち、時期不明なＳＤ15を除いた全てがこの時期の溝である。ＳＤ20が15世紀末、他は16世紀代としか時期決定できない遺構である。主な溝について概述する。

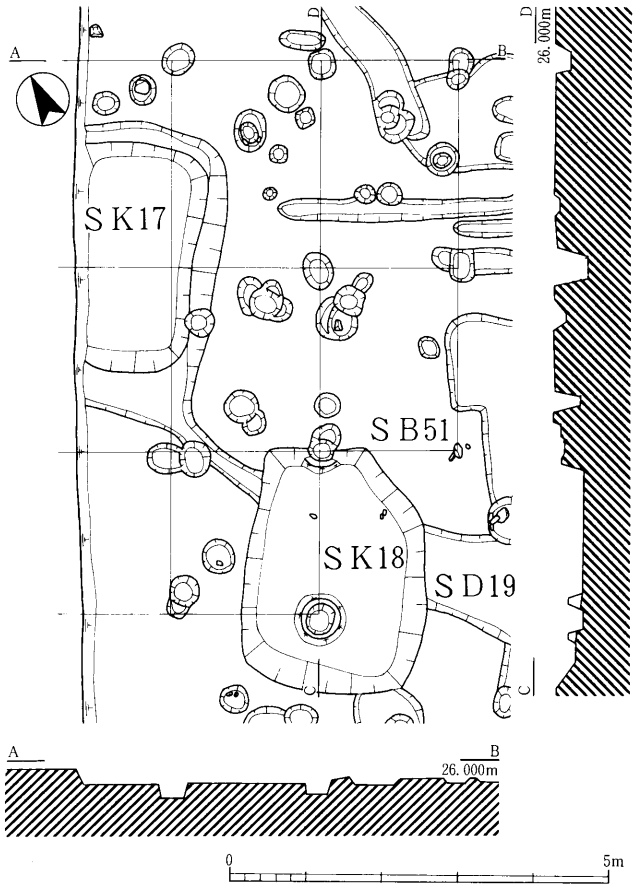
ＳＤ20　調査区の中央で北から南へ約25ｍにわたって検出され、ＳＫ36の北で西へ鍵の手状に折れ、約12ｍ続く。溝の幅は0.8～1.5ｍである。南北の部分では深さ約0.6ｍで逆台形状のしっかりした溝であるが、東西の部分は深さ0.1ｍ前後と浅い。溝の埋土は上層より茶褐色土→灰茶褐色土→茶褐色粘質土である。出土遺物には、土師器皿・鍋・羽釜・茶釜・茶釜の蓋、陶器椀・皿・擂鉢、天目茶椀がある。15世紀末の遺構である。

ＳＤ23　ＳＤ20と一部が重複し、ＳＤ20とは逆に東へ鍵の手状に折れる溝である。ＳＤ20より新しく、ＳＫ21・ＳＤ29に切られており溝の全容は不明である。土師器皿・鍋・羽釜、天目茶椀の他、五輪塔の空風輪の部分が出土している。16世紀前半の遺構である。

ＳＤ29　調査区の中央で東西にわたって検出された。しかし、一段低くなった西側の調査区では検出されなかった。幅 2.3ｍ前後で深さは 0.2～ 0.3ｍ前後である。土師器皿・鍋・羽釜、陶器擂鉢、平瓦や丸瓦が出土している。16世紀後半の遺構である。

Ｅ．井戸

ＳＥ６・ＳＥ13　がある。どちらも完掘はしなかった。円形の素掘りの井戸である。ＳＥ６からは土師器皿・鍋、陶器甕・擂鉢、ＳＥ13からは土師器皿・鍋、陶器椀・擂鉢、鉄釘が出土しているが、量的には少ない。



第10図　ＳＢ51実測図（１：100）

Ⅳ．遺　　物

遺物は整理箱で110箱出土している。その中心は井戸ＳＥ28から出土した平安時代後期の遺物ならびに溝ＳＤ20などから出土した15世紀後半から16世紀代の遺物である。以下、遺構出土の遺物を中心にその概要を述べたい。

１．旧石器・縄文時代の遺物

旧石器・縄文時代の遺物には石器がある。石器はナイフ形石器２点、石鏃１点、使用痕有剝片２点、剝片９点、石核１点、石核素材１点の計16点出土している。石鏃はＳＨ34の床面から出土したが、その他は遺構検出の際に黄褐色土の地山直上で出土した。石質は石鏃がサヌカイト、剝片２点が頁岩、それ以外はすべてチャートである。チャートにはナイフ形石器と同一母石と思われるものが含まれることから、大部分が旧石器時代に帰属する可能性が高い。

ナイフ形石器（19・20）（19）は背面に腹面の剝離方向と同方向の剝離面を３面とどめる縦長剝片を素材とする。打面側を除去して先端部とするもので、ブランティングは右側縁下半部と左側縁上半部に行い、大部分を腹面から、先端部付近を背腹両面から施す。刃部は鋭利で器軸に対して斜めになり、全体形が菱形を呈す。先端部と基部の認定は、側縁の長さとそこに残る微小剝離痕及び刃こぼれの顕著さをもって行った。現存値で長さ3.7cm、幅1.55cm、厚さ0.75cmである。（20）は幅のわりには全体的にやや厚手の縦長剝片を素材とする。ブランティングは左側縁下半部のみで、未調整の側縁を左右に残す。打面部及び打瘤は残置しており、調整加工のあり方からもあまり素材を変形していないようである。現存値で長さ3.4cm、幅1.25cm、厚さ0.8cmである。

石鏃（21）　薄手の凹基無茎鏃で先端部と片方の脚部を欠く。側縁が直線的で脚部は先細りせず丸みをもち、やや深めに抉りを入れる。調整は表裏面とも丁寧に行われている。現存値で長さ1.45cm、幅1.45cm、厚さ0.2cmである。

ナイフ形石器（19・20）はともに本来長さが４cm以上あると思われるもので、素材の縦長剝片をあまり変形せずに調整加工を施すことから、資料の少なさから即断はできないものの、時期的にはカリコ遺跡より古く、上地山遺跡に併行もしくはやや古いと思われる。石鏃（21）は風化の度合と形態から縄文時代のものと考えられる。[24]

２．弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は中期後葉の遺物がＳＸ１～３、ＳＫ32・41、包含層から壺形土器・甕形土器・蓋形土器・柱状の脚台部が出土しており、壺形土器・甕形土器については次の様に区分する。

壺形土器Ａ　太頸壺を壺Ａとし、ＡａとＡｂに区分する。Ａａ－短頸壺である。短い直立した頸部と水平に開く口縁部をもち、頸部には紐孔が穿たれている。口唇部は無文である。体部は下から1／3で最大径となり、ソロバン玉形となる。Ａｂ－広口壷である。頸部は短い円筒状をなし、口縁部で外反する。口唇部には波状文が施される。体部の最大径はＡａより上で中央になる。やや丸みを帯びたソロバン玉形である。

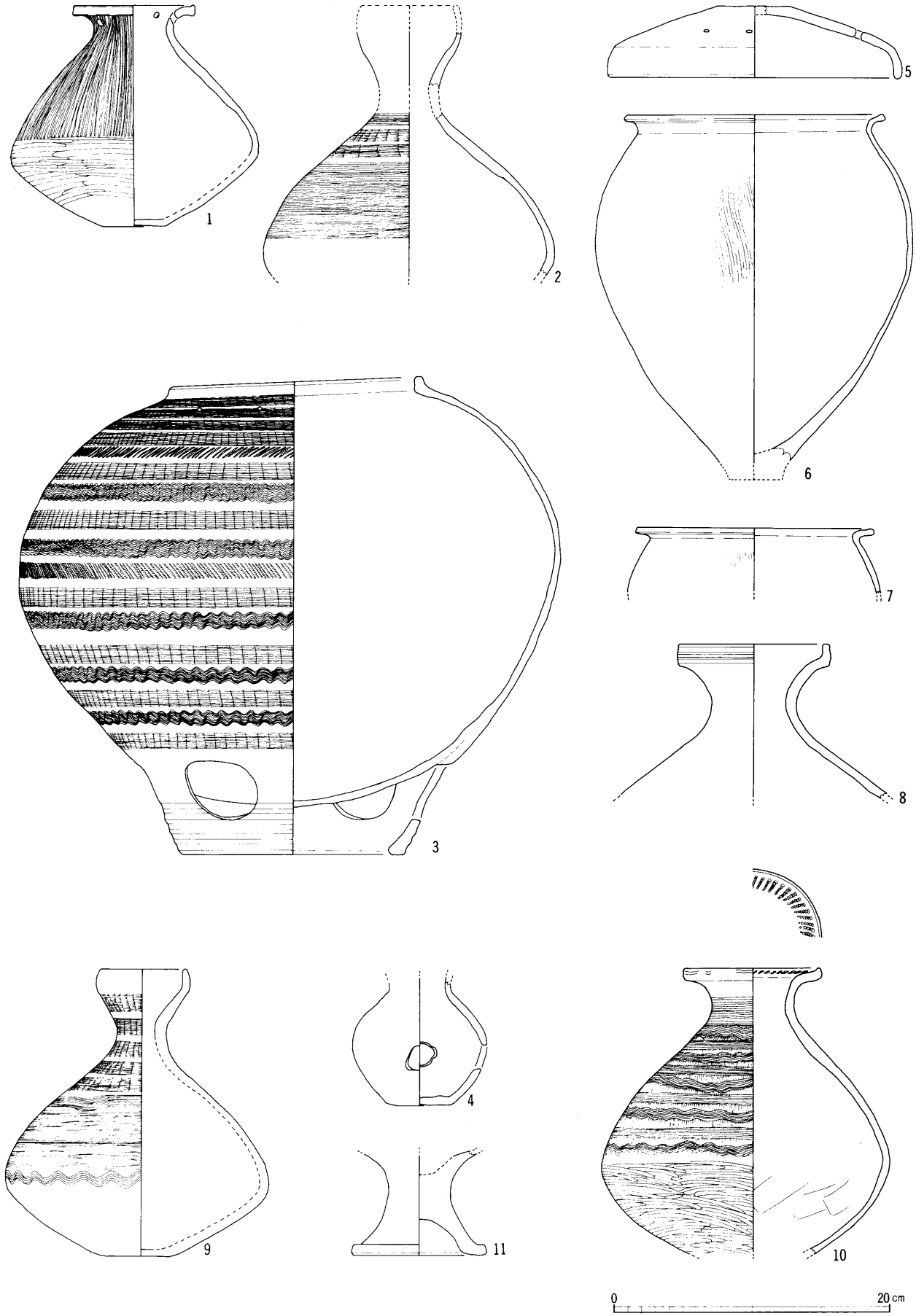
壺形土器Ｂ　細頸壺を壷Ｂとし、ＢａとＢｂに区分する。Ｂａ－受け口状の細頸壺である。直立して受け口をなす口縁部の外端面に凹線文を施すものである。完形品はないが、体部はソロバン玉形である。Ｂｂ－袋状口縁の細頸壺である。頸部は細い円筒状をなし、よくしまっている。口頸部は上端部に向かって内弯する。体部は下から1／3で最大径となり、ソロバン玉形である。

壺形土器Ｃ　台付無頸壺を壺Ｃとする。球形に近い体部に僅かに立ち上がる口縁部が付く。台部は円形の透かしがあり下端に凹線文を施す。

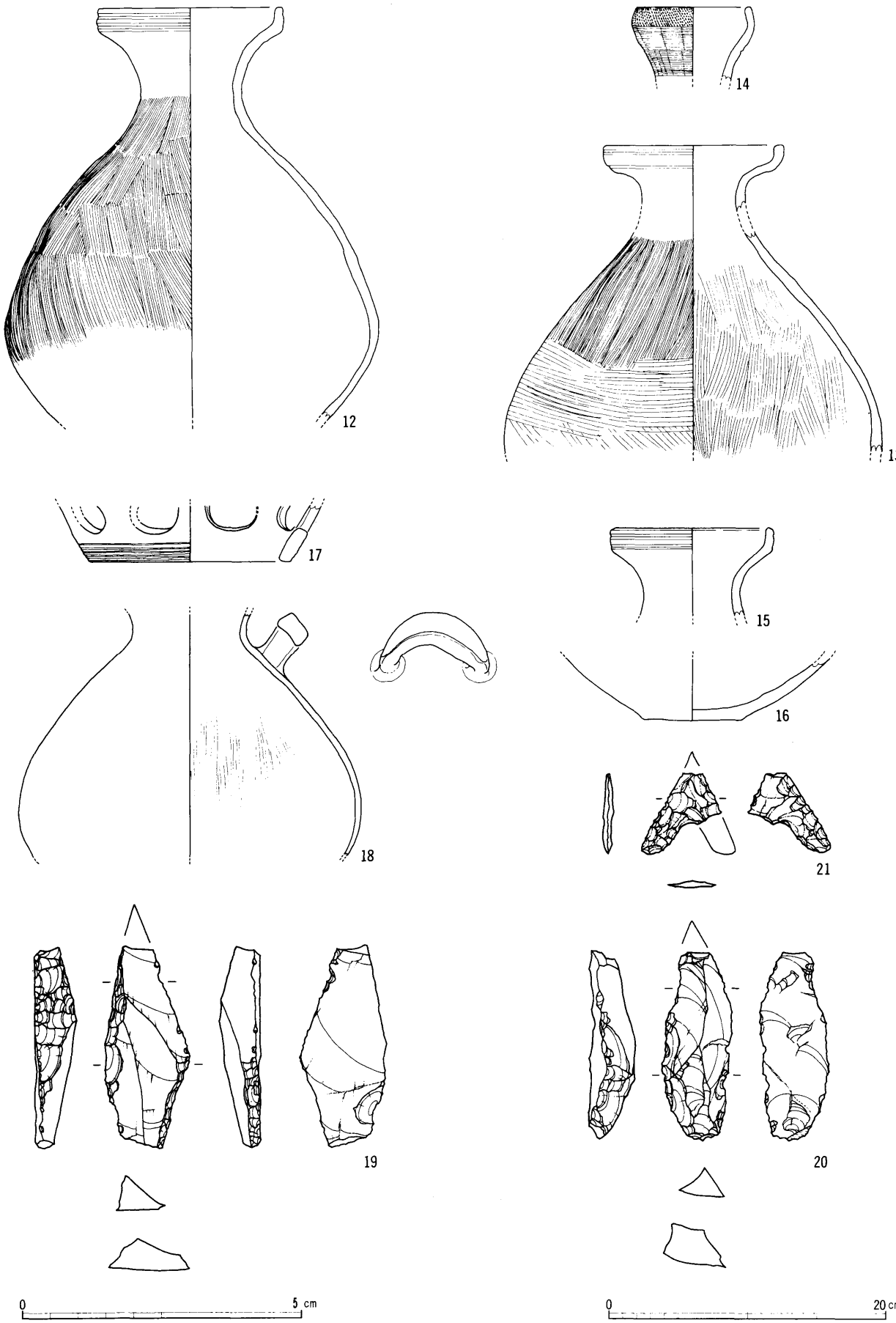
壺形土器Ｄ　小型壺を壺Ｄとする。平底で球形の体部をなす壺である。

壺形土器Ｅ　把手付土器を壺Ｅとする。全体の形は不明であるがおそらく水差形土器と思われる。

甕形土器Ａ　体部は中央よりやや上で張り出し、短い頸部をもち、口縁部は強く外折し、内面に稜を持つ。



第11図　出土遺物実測図（1）（1：4）



第12図　出土遺物実測図（2）（19・20・21は1：1、他は1：4）

甕形土器B　Aと類似するが頸部が短い。

A．SX1出土遺物（1～7）

壺形土器（1～4）　Aa（1）・Bb（2）・C（3）・D（4）がある。（1）は体部上半は縦方向のミガキ、下半は横方向のミガキで調整するものである。口唇部は無文である。頸部には2個2対の蓋用の紐孔をもつ。（2）は頸部に横位の櫛描直線文を1条、簾状文を2条施す。体部上半には全面に横位の櫛描き直線文を施すが表面の風化が激しく何条あるかは不明である。口頸部も風化が激しく調整方法は不明である。（3）は口縁部から体部下半にいたるまで12本をひとつの単位とする櫛描き簾状文・列点文・波状文で加飾される。口縁部から簾状文が4条→左下がりの列点文→簾状文→波状文→簾状文→波状文→右下がりの列点文→以下、簾状文と波状文を交互に3度繰り返し、最後が簾状文である。台部には6個の円形透かしがあり、下半には5条の凹線文が施される。また、口縁部直下には2個2対の紐孔がある。（4）は小型のもので、最大径10cm弱である。体部は風化が激しいが内外面ともナデによって調整されていたものと思われる。焼成後の穿孔が2ヶ所で施される。

蓋形土器（5）　甕形土器（6）の近くで破片で出土したもので、当初は高杯と考えていたが2個2対と思われる紐孔がみられることから蓋と判断した。風化が激しいが上部は縦方向のヘラミガキ、口縁部は横方向のヘラミガキが施される。

甕形土器（6・7）　A（6）とB（7）がある。いずれも風化が激しいが縦方向のハケメが施されているようである。（6）の最大径は胴部の上方1／3で胴の張る甕である。

B．SX2出土遺物（8）

壺形土器Ba（8）がある。口縁部の外端面に3条の凹線文を施す。頸部以下は風化が激しく、調整方法、文様とも不明である。

C．SX3出土遺物（9～11）

壺形土器（9・10）　Bb（9）・Ab（10）がある。（9）は口頸部から体部にかけ12本をひとつの単位とする櫛描き簾状文を5条施し、更に体部の中程には、横位の直線文を施す、この直線文は7本と5本をひとつの単位とするものを組み合わせて施している。更に体部文様帯の最下段には5本をひとつの単位とする櫛描き波状文を施している。体部の下半は文様は施されずにナデによって調整されている。(10)の口唇部の波状文は風化が激しく残りはよくない。頸部には7本をひとつの単位とする横位の櫛描き直線文を2条施す。体部上半は縦方向のハケメの後、波状文と直線文を交互に4度繰り返し、最後に波状文を施す。体部下半は横方向のヘラミガキで調整する。口縁部内面には、櫛による列点文を施す。

柱状の脚台部(11)　おそらく鉢の脚台部ではなかろうか。

D．SK41出土遺物（12～14）

壺形土器（12～14）　Ba(12・13)・Bb(14)がある。(12)は口縁部の外端面に2条の凹線文を施す。頸部以下には縦方向のハケメ調整がみられる。(13)も(12)と同様のものであるが、体部中央には横方向のハケメ調整がみられる。内面も残りが良く縦方向のハケメ調整がみられる。(14)は口頸部のみである。櫛描きによる簾状文が2帯施され、上端部には刺突文が施される。刺突文は7本、簾状文は14本を単位としている。

E．SK32出土遺物(15・16)

壺形土器(15・16)　Ba(15・16)がある。(15)は口頸部で、口縁部の外端面に2条の凹線文を施す。(16)は底部であるが(15)と同一個体である。

F．包含層出土の遺物(17・18)

壺形土器C(17)とE(18)　がある。(17)は台付無頸壺の台の部分である。円形の透かし孔があり、下半に5条の凹線文を施す等SX1出土の（3）との共通性がみられる。(18)は水差形土器と思われる。体部はソロバン玉形で肩部に横位の半環状把手が付いている。把手の断面は隅の丸い台形状である。風化が激しいが体部には文様を持たない。

3．奈良時代の遺物

奈良時代の遺物は土坑SK24・27・31等から出土している。いずれも後期でも新しい時期の遺物で8世紀末頃のものである。土師器杯には杯A（高台の付かないもの）と杯B（高台の付くもの）があり、皿は高台の付かないものばかりであるが便宜上皿Aとした。

A．ＳＫ31出土の遺物（22～31）

土師器杯Ａ(22)　底部と口縁部の境が明瞭ではなく、口縁部が弱く外反するものの端部では内弯気味のものである。内面には螺旋暗文がみられる。

土師器皿Ａ（23～27）　浅いものＡａ(23～25)と深いものＡｂ（26・27）がある。Ａａには底部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁部が内弯気味に立ち上がる(23)、平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる(24)、口縁部が直線的に立ち上がり端部も丸くおさまる(25)がある。Ａｂには(22)の杯と対応する(26)と全体に厚手で内面に右下がりの放射状暗文のみられる(27)がある。

土師器甕（28・29）　体部よりやや肥厚する口縁部が外反し、端部に面をもつ(28)と口縁部がくの字形に鋭く外反し、内面に稜をもつ(29)がある。

土師器鍋(30)　外側に大きく外反しながら端部をそのまま丸くおさめるものである。

須恵器杯蓋(31)　天井部のロクロヘラケズリは中心と外縁の中間あたりまでで、端部は折り曲げ断面三角形となる。

B．ＳＫ27出土の遺物(32)

須恵器高杯(32)　脚柱部の短いもので、裾端部は丸くおさめるものである。

C．ＳＫ24出土の遺物（33～43）

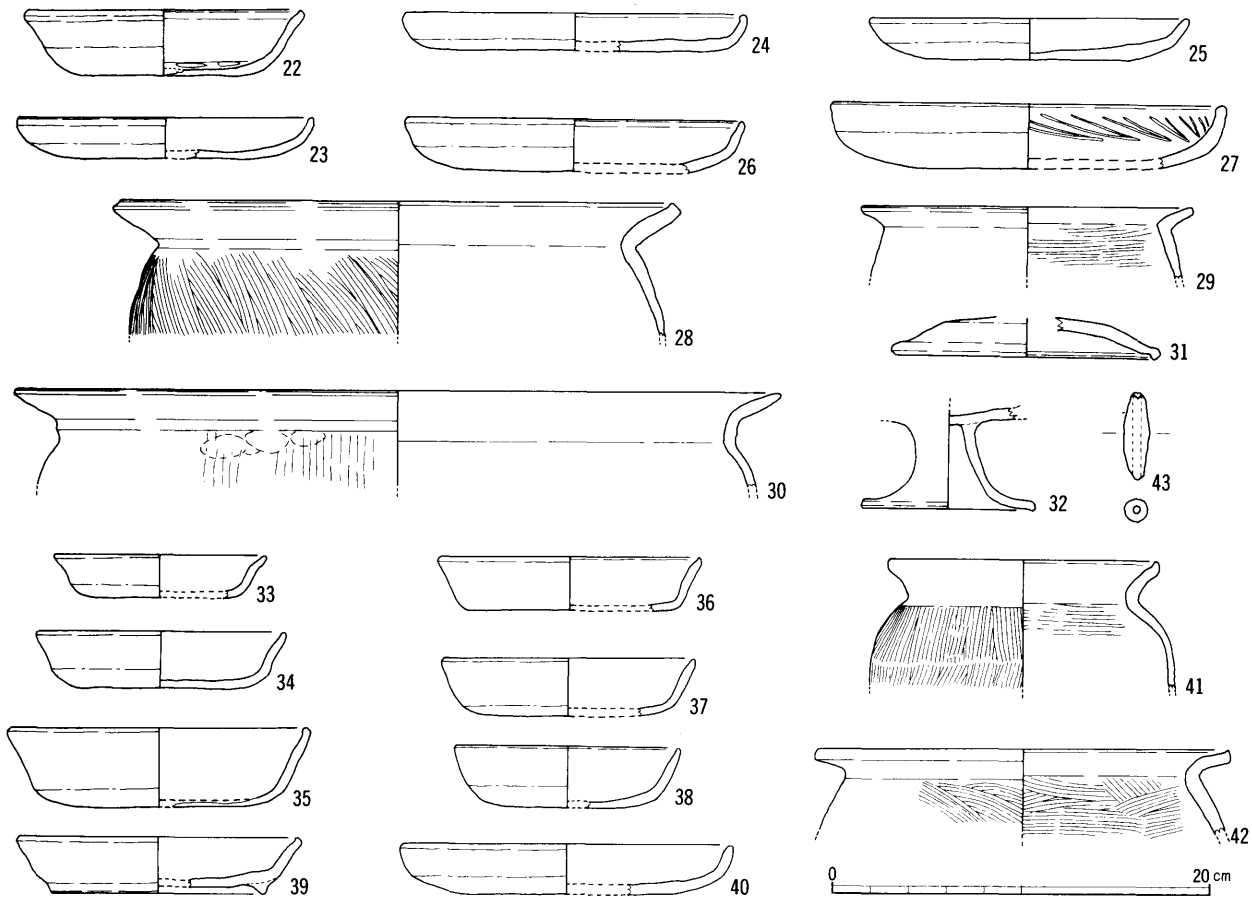
土師器杯Ａ（33～38）　底部と口縁部の境が明瞭ではなく、口縁部が弱く外反しながら立ち上がり、端部では内弯する（33～35）、底部と口縁部の境が明瞭となる(36)、これらの中間的で口縁部は直線的に立ち上がり端部はそのまま丸くおさめる(37)、底部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁部が内弯気味に立ち上がる(38)がある。

土師器杯Ｂ(39)　底部に低い高台が付くもので、口縁端部は内弯する。

土師器皿(40)　Ａａで底部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁部が内弯気味に立ち上がるものである。

土師器甕（41・42）　口縁部が上方に外反し、端部も丸く上方につまみあげる小型の甕(41)と口縁部が外側に強く外反する(42)がある。

土錘(43)　細長い紡錘形で土師質のものである。重量は4.96gである。



第13図　出土遺物実測図（３）（１：４）

4．平安時代の遺物

平安時代の遺物はＳＥ28から良好な資料が出土している。出土遺物は、井戸枠掘形の遺物・井戸枠内の遺物・井戸枠検出前の遺物に分かれる。また、非ロクロ製のものをＡ、ロクロ製のものをＢとする。

Ａ．井戸枠掘形出土遺物(44～75)

土師器小皿(44～47)　今回の報告では、原則として口径11.0cm以下、器高2.6cm以下のものを小皿、それより大きいものを皿と呼称する。小皿には、底部と口縁部の境が明瞭でなく断面弓状のＡａ（44・47)と底部と口縁部の境はＡａより明瞭で底部は平坦で口縁端部は弱く外反するＡｂ(45)、平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がるＡｃ(46)がある。Ａａ・Ａｂ・Ａｃともに口縁端部のみヨコナデされ、その範囲は器高の３分の１程である。

土師器台付小皿(57)　浅い皿に高台の付く小皿Ｂである。底部は糸切りの後ナデられている。

土師器皿(48～52)　小皿と同形態のＡａ(49～51)、Ａｂ(48・52)がある。どちらもヨコナデの範囲は器高の３分の１程である。

土師器椀(53)　口径の約２分の１の平坦な底部から長めの口縁部が外方にまっすぐに開き端部はヨコナデにより上方へ屈曲するＡａ(53)がある。

土師器台付椀(54～56)　器高が浅く、口縁端部が外反するＡａ(54)と器高が深く断面が半球形に近いＡｂ(55・56)がある。

土師器甕(58～68)　口縁部の中央が尖り両側は強いナデにより凹む、所謂「清郷型」甕Ａａ（58）と球形の体部にくの字形に曲がる口縁部が付く甕Ａｂ(59～68)がある。更に、甕Ａｂは法量からみると口径15.0cm～17.0cmの一群（59～61・63～67)、23.0cm～25.0cmの一群(62・68)がある。調整方法からみると体部外面の調整は上半は縦方向のハケメを施し、下半は(59)からみると横方向のヘラケズリを施すのが通例のようである。但し、(61・62)のように既に縦方向のハケメも間隔を置いて施すものがみられ省略化が始まっている。体部内面の調整は上半は横方向のハケメ、下半はナデによるもの(59～62)と全てナデによるもの(63～68)がある。ここでもやはり省略化の傾向が窺えると言えよう。

黒色土器椀(69～71)　いずれも黒色土器Ａ類で、(71)は不明だが(69・70）は内面に粗いヘラミガキが施されている。色調は、いずれも黒色というより灰色に近く完全にカーボンが吸着していないという特徴を示す。法量は、(69)が口径10.4cm、器高4.0cmの小椀、(70)が口径14.4cmで土師器台付椀（54～56)の口径と同じである。(71)は口径15.2cmと大きく、器高も6.4cmと深くなり、断面が半球状である。

灰釉陶器椀(73～75)　いずれも灰釉は漬け掛けで施され、(73・74)は完形ではないが、いずれも深椀であろう。東山72号窯併行の時期のものである。(75)は口縁部内面に一条の沈線がはいる。いずれも産地は不明である。

灰釉陶器皿(72)　底部のみの破片であるが、灰釉は底部のみこみ部分にハケ塗りされており、黒笹90号窯併行の時期の製品であろう。

Ｂ．井戸枠内の遺物(76～96)

土師器小皿(76～79)　Ａａ(77・78)、Ａｂ(79)の他に断面弓状で口縁部が肥厚するＡｄ(76)がみられるようになる。

土師器皿(80・81)　小皿と同形態のＡｃ(80)とＡａ(81)がある。

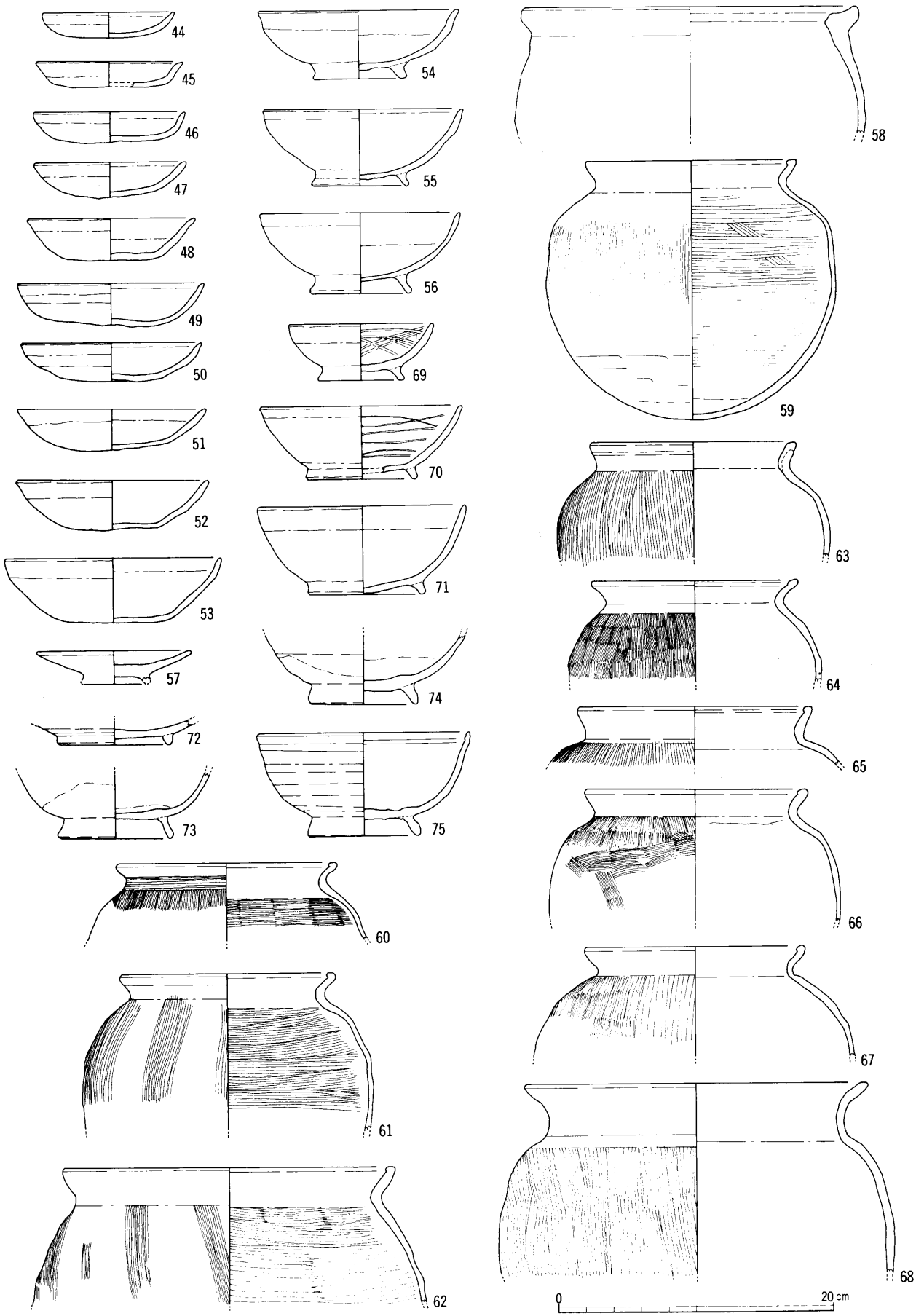
土師器台付椀(82・83)　Ａｂ(83)と口縁部が内弯気味に立ち上がるＡｃ(82)がある。

土師器甕(84～91)　全て球形の体部にくの字形に曲がる口縁部が付く甕Ａｂであるが、井戸枠掘形出土のものと比べると体部の肩の張りがなくなり、頸部からすんなりと丸くなる。法量は井戸枠掘形出土のものにみられた口径15.0cm～17.0cmの一群（85～88)、23.0cm～25.0cmの一群(90)の他に、口径12.4cm・器高12.2cmの小型の甕(84)や、口径26.0cmを超える大型の甕(89・91）もある。調整方法からみると体部内面に横方向のハケメを施すものは無くなり、外面も縦方向のハケメを施すものの他に、ハケメがみられない(85・86)もみられるようになる。

黒色土器椀(92～94)　いずれも黒色土器Ａ類である。(93)は小椀で内面のヘラミガキは粗い。

灰釉陶器椀(95)　断面三角形の高台が付くもので百代寺窯併行の時期のものである。割れた断面が磨かれており、砥石に転用されたものであろうか。

灰釉陶器広口瓶(96)　口径23.2cmの広口瓶の口頸



第14図　出土遺物実測図（4）（1：4）

部のみの破片である。

C．井戸枠検出前の遺物(97 ～134)

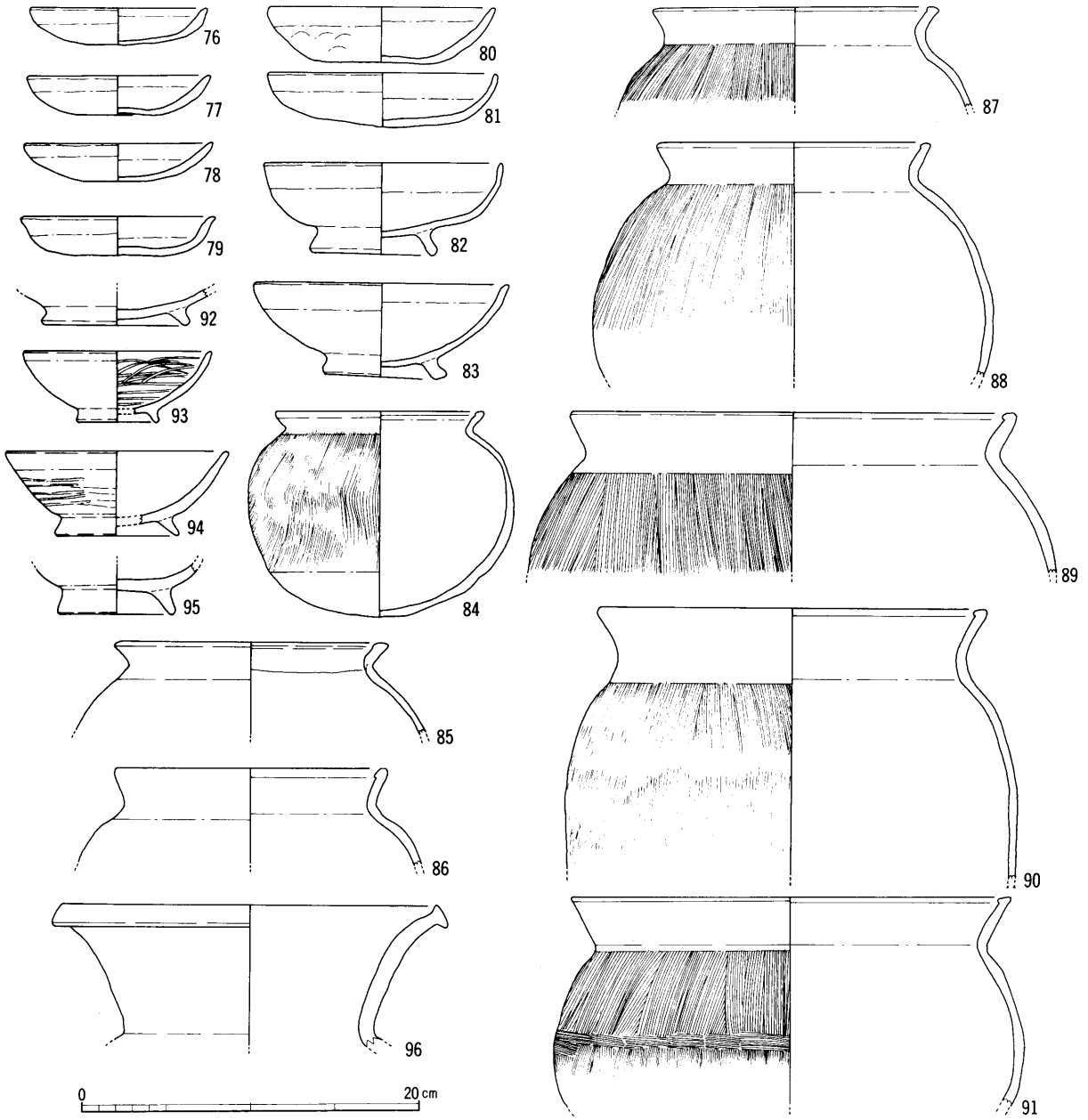
土師器小皿(97～105)　断面弓状で口縁部が肥厚する小皿Ａｄ(97～100)がこの時期の小皿として一般的になるようである。他に小皿Aa(101)、口縁端部が弱く外反し小皿Abに似てはいるが底部が平坦でなく断面弓状の小皿Ae(102～105)がある。

土師器皿(106・107)　皿Ab(106)と皿Aa(107)がある。(106)は口縁端部内面に面をもっている。

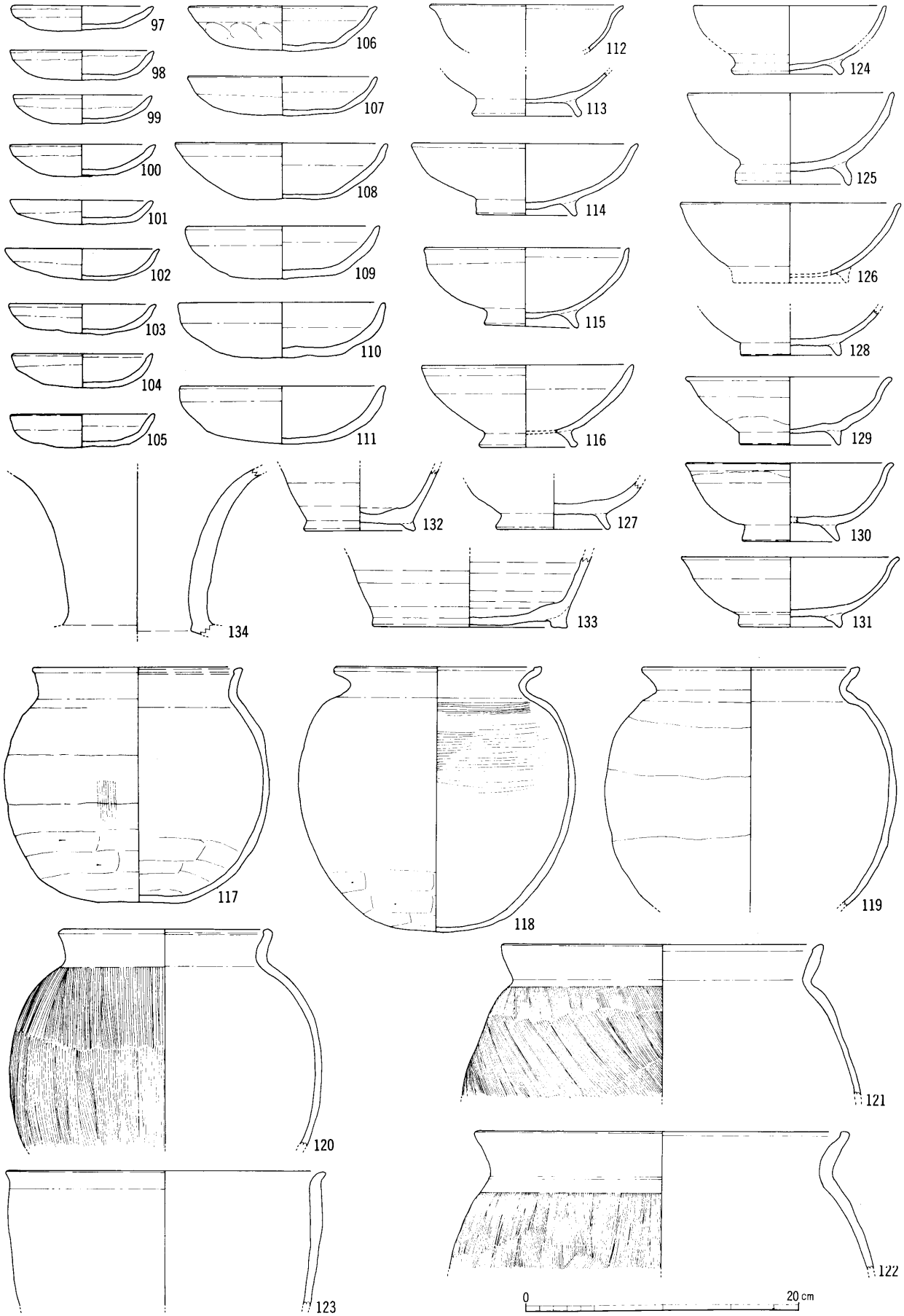
土師器椀(108～111)　椀Aa(108)と小皿Adに対応し、口縁部が肥厚する椀Ab(109～111)がある。皿同様にこの肥厚するものが一般的となる。

土師器台付椀(112～116)　椀Aa(114)と椀Ab(115・116)の他に、器壁が非常に薄く口縁部が強く外反する椀Ac(112・113)がある。

土師器甕(117～123)　甕Abとほぼ直線的に伸びる体部に短く外方に折れる口縁部が付く甕Acがある。甕Abは法量からみると口径15.0cm～17.0cmの一群(117～120)、23.0cm～25.0cmの一群(121)、口径27.0cmを超える大型の甕(122)がある。調整方法からみると(119)のような内外面ともにハケメの見られない甕が一般的であろう。また、(117)のように器高が浅く、口径と大差が無く、底部も平坦で広いものもみられる。甕Ac(123)は口径23.0cmのも



第15図　出土遺物実測図（５）（１：４）



第16図　出土遺物実測図（6）（1：4）

であまり類例のないものである。

黒色土器(124～126)　いずれも黒色土器Ａ類である。丸味をもつ体部のため底部との境は不明瞭である。全体のプロポーションは台付椀Ａｂに似ている。内面はヘラミガキを施しているようであるが残りが悪い。(124) は口径14.0cmとやや小さいものの明らかに小椀と呼べるものはみられない。また、法量においても土師器台付椀と似かよっている。

灰釉陶器椀(127～131)　断面三角形の高台が付くもので、深い体部のものは無くなる。また、底部の回転糸切痕の消し方も雑である。すべて、百代寺窯併行の時期のものである。

灰釉陶器水注(132)　高台径が7.8cmと小さいことから水注の底部と思われる。

灰釉陶器広口瓶(133・134)　(133) は底部、(134) は口縁部である。

5．室町時代以降の遺物

室町時代以降の遺物は15世紀前半から16世紀後半にかけての土師器、陶磁器が出土している。特に、ＳＤ20からは15世紀末のまとまった遺物が出土している。

Ａ．ＳＤ20出土遺物(135～166)

土師器皿(135～140)　口径7.8cm前後で器高1.6cm～2.0cmと深く、口縁部が内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさまる(135～138)、口径・器高ともに小さくなり、口縁部も正円にならず、歪みがみられる(139・140)がある。

土師器茶釜(141・142)　(141) は平坦な体部から屈曲して外反する口縁部を有するもので茶釜の蓋である。中央につまみが付く。(142) は茶釜で直口気味の口縁部である。

土師器鍋(143～145)　口縁部が「く」の字形に屈曲して開き、口縁端部を内側に折り返し、端部外面にヨコナデが施され面を有する。(143) は頸部の稜線が不明瞭なのに対して、(144・145)は頸部の稜線が明瞭で直線的に長く伸びるが(145) の方が外に開く。

土師器羽釜(146～149)　図示した４個体とも口径、口縁端部の形態は様々であるが、基本的に口縁部は内弯し、口縁端部を外側に折り返す。

縁釉小皿(150～153)　(152) はやや大きいが、他は器高2.0cm、口径10.0cm前後で、小型化と偏平化が進んだ製品である。底部内面周辺は露胎で、釉薬は灰釉である。

施釉陶器小皿(154)　高台を除き、内外面に薄い茶色の釉薬が施釉される。高台は波状の丁寧な削りだしで、接地面が４ヶ所にある。

灰釉平椀(155～158)　(158) のみ完形品に近い。体部は直線的に開き、口唇部はやや肥厚化する。高台内の削り込みは浅く、高台幅は広い。

天目茶椀(159・160)　(160) は内反り高台の天目茶椀である。体部がやや丸みを帯び、口唇部はほぼ直立し、端部は外反する。高台内の削り込みは浅く、高台周辺は錆釉が施される。

擂鉢(161～165)　(164) は口縁端部がやや内傾し、口縁部内側にも小突起が形成されるもので、体部は直線的に開く。(165) は体部が直線的で端部はやや角張るものである。

灰釉折縁深皿(166)　体部は直線的に開き、口縁部は外反せず、内側に小突起が形成される。

Ｂ．ＳＫ36出土遺物(167～175)

土師器皿(167・168)　器高が低く、口縁部も歪みがみられる(167) と器高が深く、口縁部が内弯気味に直立し、端部も丸くおさまる(168) がある。

土師器焙烙(169)　頸部が締まらず鉢形を呈し、口縁端部のヨコナデは強く、端部は直立し受け口状となる。16世紀末のもので混入品であろう。

土師器羽釜(170)　口縁部はゆるやかに内弯し、口縁端部を外側に折り返す。

縁釉小皿(171・172)　いずれも、口縁内外面のみに鉄釉が施釉され、底部内面周辺は露胎である。底部には糸切り痕が残る。

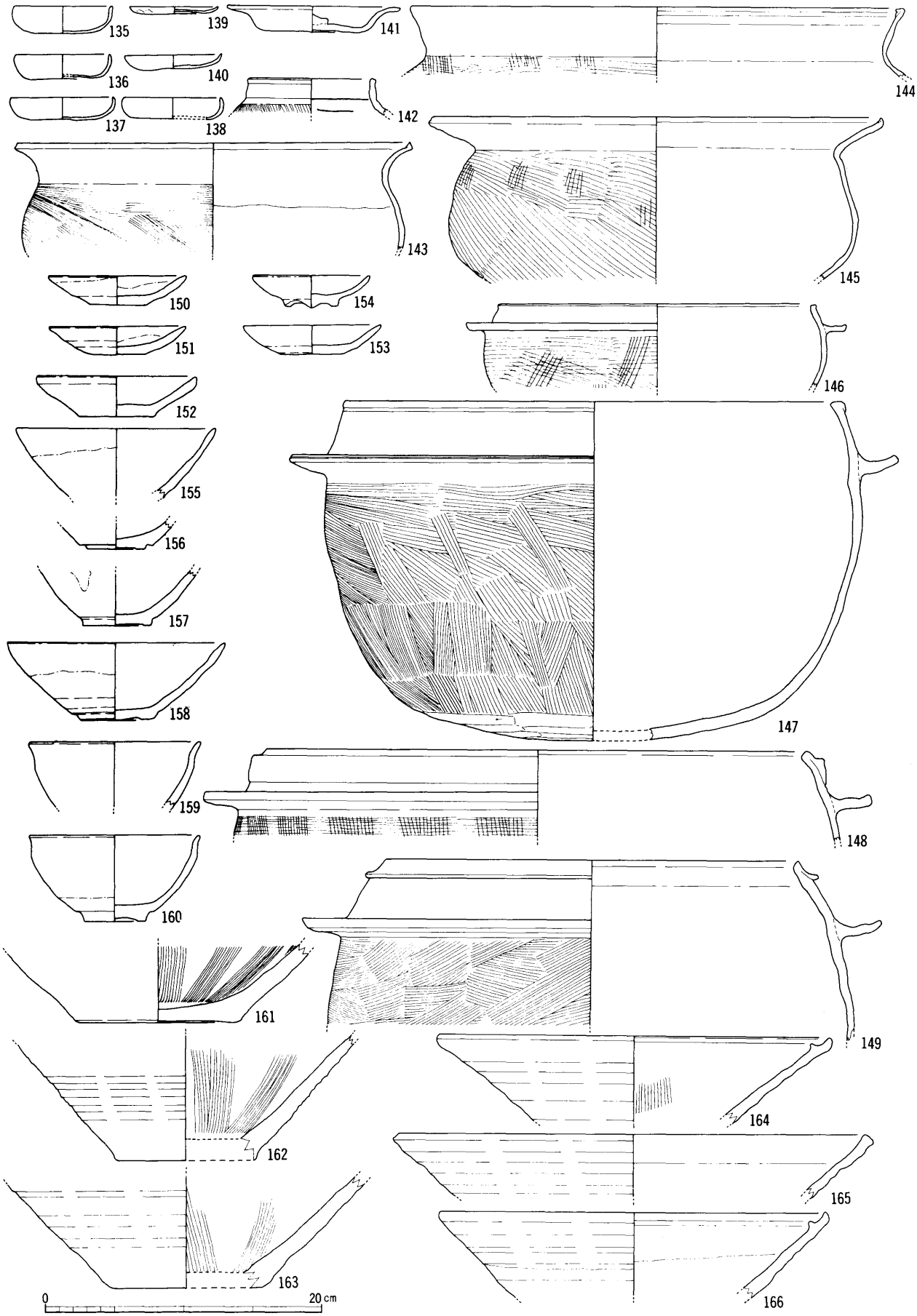
腰折れ皿(173)　薄い緑色の釉が口縁内面は全面、外面は口縁部から１cm程に施されている。

卸皿(174)　糸切り痕未調整の平底である。

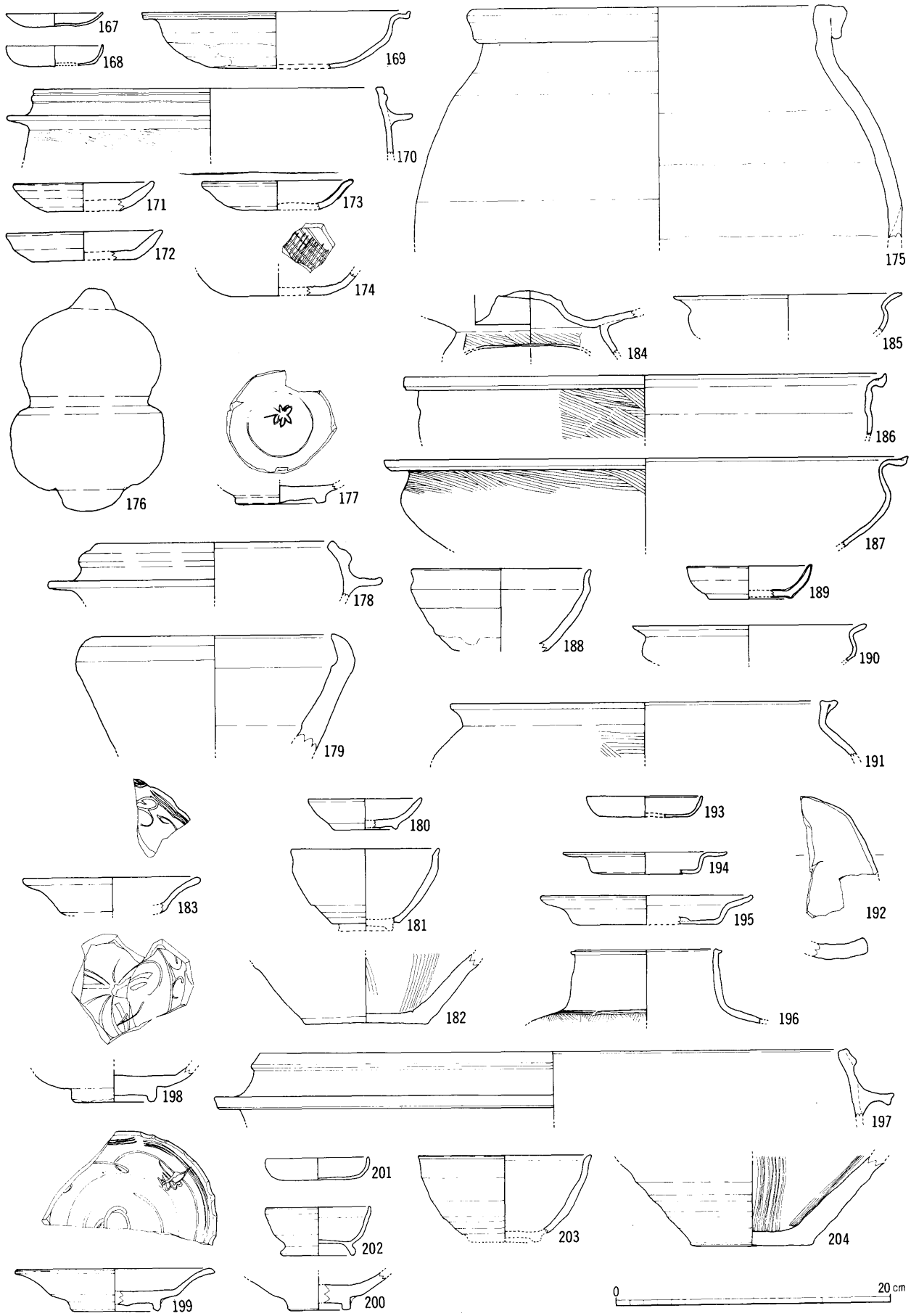
甕(175)　口縁部に「Ｎ」字状の折り返しを持つ。口縁部の内面はやや丸みを持つ。

Ｃ．ＳＤ23出土遺物(176～178)

土師器羽釜(178)　口縁部は内弯し、口縁端部を外側に折り返す。口縁端部は内傾し、内側に面を持つ。口径は小さくこぶりの羽釜で器壁は全体に厚い。



第17図　出土遺物実測図（7）（1：4）



第18図　出土遺物実測図（8）（1：4）

青磁椀(177) 底部片で底部見込みには印花文がみられる。

空風輪(176) 砂岩製の空風輪である。これのみが埋土の底から出土した。

D．ＳＤ38出土遺物(179～183)

鉢(179) 体部は直線的に開き、口縁部は内側に折れ、端部は丸くおさまる。全体に器壁は厚く、無釉で黄赤褐色を呈する。常滑産の陶器である。

陶器皿(180) 付け高台の丸皿である。付け高台は断面三角形である。

天目茶椀(181) 体部の形状は、下方はほぼ直線的で、立ち上がりは強く、口唇部はほぼ直立し、端部は若干外反する。高台周辺には錆釉が施される。

擂鉢(182) 糸切り痕未調整の平底の擂鉢で、体部は直線的に開く。

青磁皿(183) 龍泉窯系の青磁稜花皿である。薄い青緑色の釉薬が施釉され、内面に草花文を有する。

E．ＳＫ21出土遺物(184～188)

不明土製品(184) 名称・用途ともに不明な土製品である。口径の広い高台部と皿部（あるいは鍔部と呼ぶべきか）とそこから半球形に盛り上がる部分とからなる。半球形の部分には更に上方に杯部のようなものが付いていたのか欠落した痕跡が残る。また、この半球形の部分には煤が付着している。敢えていうならば、古瀬戸の後Ⅳ期にみられる仏餉具に似ている。

土師器鍋(185～187) 小形のもの(185)、半球形をした体部のもの(186)、偏平な形態が発達し、体部の最大径が上方にきているもの(187)がある。

天目茶椀(188) 体部はほぼ直線的に開き、口唇部はほぼ直立し、端部はやや外反する。高台周辺は露胎である。

F．ＳＥ13出土遺物(189)

陶器皿(189) 付け高台の丸皿である。体部下方にやや丸みを持つ。付け高台は小さく、断面三角形である。

G．ＳＤ12出土遺物(190)

土師器鍋(190) 小形のもので、口縁部の折り返しも短く、直線的に開く。端部は丸くおさまる。

H．ＳＫ４出土遺物(191・192)

土師器鍋(191) 口縁端部を外側に折り返すもので、外面には煤が付着している。この口縁端部の形態は、本遺跡でもＳＥ28で出土している所謂「清郷型」の端部形態と似ている。また、この時期の茶釜の口縁端部にもみられる。

不明土製品(192) 厚さ１㎝前後の板状の土製品であるが、用途は不明である。

Ｉ．ＳＫ９出土遺物(193～197)

土師器皿(193) 口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。

土師器茶釜(194～196) (194・195)は蓋である。いずれも平坦な体部から屈曲して開く口縁部を有するものである。(195)のつまみは中央からずれ、平なものでブリッジ状のつまみかもしれない。(196)は直口気味の口縁部の茶釜で、口縁端部は外側に折る。

土師器羽釜(197) 口縁部は緩やかに内弯し、口縁端部を外側に折り返す。

J．ＳＤ19出土遺物(198)

青磁椀(198) 龍泉窯系の青磁椀である。高台は断面四角形で、釉色は黄色味の強いくすんだ緑色をしている。内面に草花文を有するがシャープさを欠いている。13世紀代のものと思われ、溝の時期とは異なり、混入品であろう。

K．整地層出土の遺物(199・200)

青磁皿(199) 龍泉窯系の青磁稜花皿である。薄い青緑色の釉薬が施釉されている。

青磁椀(200) 龍泉窯系の青磁椀である。高台は断面四角形で、釉色は薄くて明るい緑色である。

L．柱穴出土の遺物(201～204)

Ｍ２区柱穴４から土師器皿・小椀、天目茶椀、擂鉢がまとまって出土している。

土師器皿(201) 口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。

土師器小椀(202) 径の大きいしっかりした高台の付く小椀である。口縁部は丸みをもって立ち上がり端部は丸くおさまる。

天目茶椀(203) 体部の形状は下方はほぼ直線的に開き、口唇部やや外傾気味で端部は外反し、内側に面を持つ。

擂鉢(204) 糸切り痕未調整の平底の擂鉢で、体部は直線的に開く。

V．結　　語

今回の調査は道路買収用地部分のみで東西16～32m、南北64mであった。このような部分的な調査のため、検出した遺構・遺物は少なく、更に丘陵の東西に広がる波瀬Ｂ遺跡全体の解明には至らなかったが、その様相を断片的に明らかにしえた。以下、遺構・遺物とに分けまとめとしたい。

1．遺構について

A．方形周溝墓について

今回の調査では、弥生時代中期後葉の方形周溝墓ＳＸ１・２・３を検出した。宮川流域におけるこの時期の方形周溝墓の発掘調査例では、玉城町上の山遺跡で検出の方形周溝墓ＳＸ１・４が知られているのみ[30]で、新たな資料の追加となった。両遺跡は宮川の支流外城田川を挟んで、直線距離で約1.7km離れているにすぎない。これまで弥生時代後期の方形周溝墓は、玉城町月よべ遺跡[31]・伊勢市野垣内遺跡[32]・中楽山遺跡[33]・大薮遺跡で検出[34]されていたが、宮川流域における方形周溝墓の墓制の導入は確実に中期後葉まで遡ることが改めて実証されたと言えよう。

さて、この流域における方形周溝墓の墓制はどのような経路をたどって伝播したのであろうか。今のところ県下での確実な初見と考えられているのが、一志町片野遺跡ＳＸ100[35]と嬉野町下之庄東方遺跡６号墓[36]で、中期前葉と考えられている。両者は共に雲出川流域の遺跡で約 2.5kmの距離にある。また、下之庄東方遺跡の東方４kmの中之庄遺跡ＳＤ９～11[37]も中期前葉の方形周溝墓の可能性がある。中之庄遺跡は県下最古の弥生遺跡であり、伊勢湾西岸地方においては、この雲出川流域で畿内から伝播してきたと思われる新しい土器様式、墓制が最初に出現しているのである。雲出川以南の方形周溝墓で、中期中葉のものは片野遺跡ＳＤ18、下之庄東方遺跡７・69・76・82・86号墓[38]、多気町花の木遺跡のＳＸ22[39]、その可能性のあるものは明和町金剛坂遺跡のＳＸ31・32（1971年調査）がある[40]。中期後葉のものは、一志町鳥居本遺跡のＳＸ１（町調査[41]）、ＳＸ１・２（県調査[42]）、下之庄東方遺跡１・２・３・13・15・11（小野地区）・21・33・38号墓、明和町寺垣内遺跡ＳＸ15～17[43]、金剛坂遺跡のＳＸ36（1971年調査）、そして、上の山遺跡ＳＸ１・４、波瀬Ｂ遺跡ＳＸ１・２・３がある。また、中期としか分からないものに下之庄東方遺跡４・５・14・（高畑地区）・16・26・34・75号墓、斎宮跡ＳＸ24～27（第72－１次）、ＳＸ１～３（第72－２次[44]）がある。後期になるとその数は増大し、片野遺跡、下之庄東方遺跡、松阪市草山遺跡[45]、斎宮跡（第39次調査[46]）、金剛坂遺跡（1971・1984年調査[47]）、寺垣内遺跡、大薮遺跡、野垣内遺跡、中楽山遺跡、月よべ遺跡で検出されている。このように、畿内から雲出川流域に伝播した新しい墓制が南下するルート上に波瀬Ｂ遺跡、上の山遺跡が位置付けられ、中期後葉あたりから、その数も増え、後期になると増大すると言えよう。

次に方形周溝墓の形態・規模についてであるが、形態分類は、石黒氏の分類[48]をもとにすると、ＳＸ１は３隅ないしは４隅のあくＡ３型かＡ４型であり、規模は東西14.0m、南北12.5mと推定される。ＳＸ２・３は形態・規模ともにはっきりしないが、形態はＳＸ１とは異なり、１隅ないしは２隅のあくＡ１型あるいはＡ２型と思われ、一辺の規模は９～11m前後となろう。なお、ＳＸ１の南で検出されているＳＤ15・16・41からは弥生時代の遺物は検出されていないが、埋土が他の方形周溝墓と同じ暗褐色土であることから一辺６m前後と規模は小さいものの方形周溝墓の可能性もあることを付け加えておきたい。

さて、これらと他の遺跡での検出例との比較であるが、先ず、形態がはっきりしている中期の方形周溝墓は雲出川以南においては17例ある。このうちの実に12例までがＡ４型である。異なるものは中期前葉の片野遺跡ＳＸ100と中之庄遺跡のＳＤ９～11がＡ３型、中期中葉の金剛坂遺跡ＳＸ31がＡ１型、ＳＸ32がＡ０型、中期後葉の寺垣内遺跡ＳＸ15がＡ２ｂ型である。ただし、Ａ４型12例の内、時期が特定できるのは中期中葉のものが下之庄東方遺跡７号墓、花の木遺跡ＳＸ22、中期後葉のものが鳥居本遺跡のＳＸ１（町調査）、ＳＸ１（県調査）、下之庄東方

遺跡１号墓の５例で他７例は中期としか分からないものである。また、中期の方形周溝墓で形態が不明なものは23例ある。このように数少ない資料をもとに述べるならば、中期前葉から中葉にかけてのこの地域の出現期の方形周溝墓は非Ａ４型で、中期中葉から後葉にかけてはＡ４型が主流となっていると言え、中期中葉にひとつの画期があると言えよう。後期になると更にもうひとつの画期があり、草山遺跡や寺垣内遺跡にみられるように、一辺の中央付近があくＢ１型や１隅だけがあくＡ１型が主流となっている。このような状況から考えると波瀬Ｂ遺跡ＳＸ１、上の山遺跡ＳＸ４はＡ４型である可能性が強いと言えよう。

規模（以下の数字は、溝の外側の長さを一辺とし、単位はｍである。）については中期前葉の片野遺跡ＳＸ100が7.8×6.3、中之庄遺跡のＳＤ９～11が11×7.5、下之庄東方遺跡６号墓が？×8.2とやや小さく、中期中葉から後葉にかけては概ね10～14ｍ前後の規模の方形である。波瀬Ｂ遺跡ＳＸ１・２・３もこの範疇に含まれる。例外としては中期後葉の鳥居本遺跡のＳＸ１（町調査）が7.2×？、ＳＸ１（県調査）が6.9×5.0と小さく、中期中葉の下之庄東方遺跡７号墓が17.0×11.6と長方形の形態を示すものがある。後期になると６～８ｍ前後のものと10～14ｍ前後のものと大きく２つに分かれ、６ｍ以下のものや、14ｍを越えるものもみられるようになる。

これまで方形周溝墓を個体の形態の側面から述べてきたが、群としてはどうであろうか。波瀬Ｂ遺跡ＳＸ１・２・３の場合は、各方形周溝の溝を重複させることなく展開する連接式の群構成として捉えられる。このような周溝が切り合わずにまとまっており、周溝を含めた墓域の意識がある群構成をする例としては斎宮跡があげられる。

今回の調査では同時期の集落は検出されていない。それは、今回の調査地が墳墓の群集する墓域であったためで、おそらく近辺に集落が存在するのであろう。

最後に、本稿においては雲出川流域からの新しい墓制の南下ルートの中に波瀬Ｂ遺跡を位置付け、その中での比較検討を行なってきたため、県内においても安濃川流域や鈴鹿川流域、あるいは伊賀地域といった地域については述べていない。むろん、このような地域でも鈴鹿市の東庄内Ｂ遺跡[49]や上箕田遺跡[50]において、中期前葉に位置付けられる方形周溝墓は検出されており、それぞれの展開が考えられるのである。例えば、形態について東庄内Ｂ遺跡のＳＸ 339・346は中期前葉と考えられるものでＡ４型であり、ＳＸ 349・353・360は中期中葉と考えられるもので非Ａ４型である。また、亀山市地蔵僧遺跡ＳＸ１～３も中期中葉と考えられるもので非Ａ４型である[51]。このような状況は雲出川流域以南の地域とは逆の在り方を示している。また、Ａ４型の成立は尾張の朝日遺跡にその始源があり[52]、方形周溝墓について考える場合において広域的な捉えかたが必要であることは認識しており、それについては稿を改めることとしたい。また、供献遺物についても述べていないが、遺物の考察で述べることとしたい。

Ｂ．掘立柱建物について

今回の調査では９棟の掘立柱建物が検出された。建物の時期はいずれも15世紀末から16世紀代と考えられる。この内、ＳＢ47・51は総柱建物であるが、他の７棟は3 間×2 間、4間×2間といった規模の東西棟の建物である。また、この７棟の建物の内、ＳＢ42とＳＢ50は棟方向が同じで西側妻柱列が揃っている。更にＳＢ42はＳＢ43・44と重複し、ＳＢ50はＳＢ49と近接することからそれぞれ建て替えが行なわれているようであり、建物の規則的な配置が行なわれているとみてよかろう。また、建物の規模を一尺＝0.303ｍで計算すると桁行は27尺とか29尺とかいった切りの良い数字になるのに対して梁行は15.5尺とかいった半端な数字になる特徴を示している。この時期の建物としてはこういった総柱建物でない建物は珍しく、類例は久居市戸木遺跡にみられる。戸木遺跡では室町時代末期から江戸時代初頭の掘立柱建物が49棟検出されており、その内約半数の建物が総柱建物ではなく、東西棟あるいは南北棟の3間×2間、4間×2間といった規模の建物である。報告書では、これらの建物は戸木遺跡の西約500ｍに位置する戸木城を中心とする集落の一部と位置付けられている[53]。波瀬Ｂ遺跡の場合はどうであろうか。溝、土坑から出土する遺物には天目茶椀、灰釉平椀など

瀬戸・美濃窯の製品が多く、完形に近いものもみられるという特徴、また、建物の規則的な配置など波瀬Ｂ遺跡における15～16世紀代の位置付けとして次の資料が参考となる。

『榛木文書（鏑矢伊勢方記）』中にある「山田三方神役人等目安写」[54]によると、田丸山の山上には住宅が建ち、山の下には数十ヶ所の関所が設けられ、参宮の人々に迷惑をかけているとあり、明応八年五月の日付がある。明応八年は 1,499年にあたり、波瀬Ｂ遺跡の遺構の時期と一致し、検出された遺構はこの文書の記事と何らかの関連を持つものと想定できよう。

２．遺物について

Ａ．弥生時代の遺物について

今回の調査では方形周溝墓を中心として中期後葉の良好な資料が出土している。これらを周辺地域の資料と比較検討してみたい。

壺Ａａは県内に於ける類例は少なく、津市納所遺跡ＳＢ８[55]、安濃町北端遺跡ＳＢ１[56]、松阪市涌早崎遺跡ＳＫ25[57]にみられる。当遺跡ＳＸ１出土の（１）と比較すると、納所遺跡出土のものは器高・口径ともに大差はないが胴部の張りがやや弱い。北端遺跡出土のものは口径・器高ともおおぶりで、胴部の最大径の位置に２条の凹線文が施されるという違いが認められる。また、涌早崎遺跡出土例は頸部に紐孔をもたないが、体部外面の調整方法は上半が縦方向のヘラミガキ、下半を横方向のヘラミガキで調整しており、当遺跡例と同じである。県内においては類例が少ないので県外の資料にあたってみると、近江地域では近江Ⅳ－２様式からみられる特徴的な壺とされており[58]、守山市服部遺跡に類例がみられる[59]。摂津地域では既に摂津Ⅳ－１様式において川西市栄根遺跡出土例がみられる[60]。また、河内地域でも瓜生堂遺跡に出土例がみられ、河内Ⅳ－１様式の特徴的な土器とされている[61]。伊勢地域における壺Ａａのみられる時期は摂津や河内より遅れるようで、近江地域と同じかやや遅れる時期であろう。

壺ＡｂにはＳＸ３出土の(10)があるがこれも県内に於ける類例の少ないものである。一志町鳥居本遺跡（県調査）のＳＫ３出土遺物の中に口縁端部を上方に引き出す当遺跡出土のものと似た土器がある。文様構成では、口唇部に波状文を施す点、体部には横位の直線文と波状文を施し、口縁部内面に櫛による列点文を施す点など共通の要素が多くみられる。ただし、鳥居本遺跡例の方が全体におおぶりで頸部も長いようである。更に付け加えるならば、県下におけるこの時期の広口壺は、納所遺跡ＳＫ１・津市上村遺跡[62]・鳥居本遺跡ＳＫ３・涌早崎遺跡ＳＫ24出土例などにみられるように全体のプロポーション及び文様構成は当遺跡出土例と似ているものの口縁端部を上下に拡張するものが多くみられ、片野遺跡ＳＫ82出土例のように口縁端部を下方に引き出すものもみられるようである。

壺ＢａにはＳＸ２出土の(8)、ＳＫ41出土の(12・13)、ＳＫ32出土の（15・16）がある。類例は多くみられ、下之庄東方遺跡13号墓・38号墓、上村遺跡、大鼻遺跡６号墓[63]など中村川流域よりも以北の中勢・北勢地域に分布の偏りがあり、南勢地域にはあまりみられず、松阪市涌早崎遺跡ＳＫ24に出土例がある。これらの出土例に共通する特徴は口縁部の立ち上がりに１～２条の凹線文が施され、頸部以下を細かくハケメ調整し、体部下半にはヘラミガキを施すことである。これらの出土例と当遺跡出土例を比較すると、ＳＫ41出土の（12・13）はともに口径13.2cmで、他の遺跡出土のものが10～11cm内におさまるのに対して大きく、頸部もまた太いという差がみられる。また、体部下半の調整方法にも違いがみられ、ヘラミガキではなく、ハケメ調整を行っている。ここで問題になるのはこのような口径の差、調整方法の違いが地域差なのか時間的な差なのかという点である。この点については、中勢地域の亀井遺跡ＳＫ１[64]や橋垣内遺跡Ｂ地区ＳＸ１[65]出土例などに口径が大きく、頸部が太く、しかも体部下半の調整方法もヘラミガキではなくハケメ調整であるところまで共通する例がみられることより地域差とは考えられないようである。また、時間的な差については共伴遺物の乏しい例が多く、共伴関係からは比較検討が難しい。ただ、口縁部の形態を比較検討すると、頸部から口縁部が立ち上がる変換点が角ばりシャープで、立ち上がりも直立する下之庄東方遺跡13号墓や上村遺跡出土のもの、変換点も丸く立ち上がりもやや内弯気味

でナイーブな下之庄東方遺跡38号墓や橋垣内遺跡Ｂ地区ＳＸ１出土のものなどがある。恐らくはシャープなものからナイーブなものへとの流れが考えられようが、断定はしがたい。口径が大きく、全体にハケメ調整を行っているものは後者のナイーブなものが多いようであるが、下之庄東方遺跡38号墓例などもあり、断定はできない。むしろ、このような口径が大きく、全体にハケメ調整を行っているものは、頸部に凸帯はないものの畿内で広くみられる畿内第Ⅳ様式の壺形土器Ｇ[66]や県内では北勢地域の永井遺跡[67]や上野遺跡[68]で出土例のある大型の受口太頸壺との関連を考えたほうが良いのかも知れない。なお、口縁部の立ち上がりに１～２条の凹線文が施される受け口状の細頸壺には、凹線文が施されていないものが、下之庄東方遺跡１号墓、鳥居本遺跡ＳＸ１（町調査）出土例などにあり、凹線文導入以前のものと考えられる。特に下之庄東方遺跡１号墓例などは下之庄東方遺跡13号墓・38号墓例と比べ、凹線文が施されていないだけで、他の調整方法などは全く同じである。

壺ＢｂにはＳＸ１出土の(2)、ＳＸ３出土の(9)、ＳＫ41出土の(14)がある。類例は橋垣内遺跡Ａ地区旧河道４[69]・橋垣内遺跡Ｂ地区ＳＸ１、亀井遺跡ＳＫ１、下之庄東方遺跡33号墓例などがある。このうち、完形品で全体がわかるものは（９）と橋垣内遺跡Ａ地区旧河道４及び下之庄東方遺跡33号墓出土例であるが、いずれも頸部には簾状文を施し、体部上半には横位の直線文、そして最下段には１条の波状文を施すという共通の要素がみられる。

壺ＣにはＳＸ１出土の(2)、包含層出土の(17)がある。非常に類例の少ない土器で、納所遺跡ＳＤ12から台付無頸壺が出土しているが、体部はソロバン玉状で、台部も高く外に開きふんばるもので台というよりは脚と呼ぶべきものであり、随分と形状は異なる。台付無頸壺の台の裾端部に凹線文を施すものは畿内地域に多くみられ、摂津では摂津Ⅳ－Ⅱ様[70]、大和では大和Ⅳ様式[71]、河内では河内Ⅳ－Ⅰ様式[72]、山城では山城Ⅳ－Ⅱ様式[73]からそれぞれみられる。また、凹線文出現以降のこれらの台付無頸壺は唐古・鍵遺跡出土例[74]のように体部にも凹線文が活発に施文されているが、当遺跡例では12本をひとつの単位とする櫛描き簾状文・列点文・波状文で加飾されるという違いが認められる。

壺Ｅには包含層出土の(18)がある。所謂、畿内型の把手付水差形土器である。従来、伊勢地域では鳥居本遺跡（県調査）の出土例のみであったが、今年度調査された松阪市涌早崎遺跡でも出土しており、伊勢地域での出土例は３例となる。また、伊賀地域では、名張市辻垣内遺跡[75]、中戸遺跡[76]、下川原遺跡[77]で出土例があり、伊賀地域を経由して波及してきた土器である。なお、中村川流域の嬉野町午前坊遺跡では摂津型の水差形土器が出土している[78]。

甕にはＳＸ１出土の(6・7)があるが、いずれも風化が激しく調整方法が分かりにくいが外面には縦方向のハケメがみられる。また、口縁部は強く外折しており、端部がやや肥厚する。全体に器壁が非常に薄いのも特徴的である。口縁端部には刻目もなく、体部もハケメ調整のみで加飾性の乏しい点では南勢地域の特徴を持つ甕である。

さて、方形周溝墓の墓制の伝播と出土遺物がどのように関わるかについてであるが、壺Ｂａについてみるならば、中期後葉にみられるこの土器は北勢地域では永井遺跡ＳＸ74、大鼻遺跡６号墓、中勢地域では橋垣内遺跡ＳＸ１，下之庄東方遺跡13・38号墓と広範囲で共通の要素を持つといえよう。壺Ｂｂについては下之庄東方遺跡33号墓に類例がみられ、頸部に簾状文、体部上半に横位の直線文を施し、その最下段には波状文を施すという共通の要素がみられる。また、壺Ｃは非常に装飾性に富んだ土器である。このような装飾性に富んだものは後期初頭に位置付けられる月よべ遺跡ＳＸ３の大型細頸壺にもみられ、この地域では後期まで引き継がれる特徴かも知れない。墓制の伝播と供献遺物との関係、あるいは共伴遺物の比較検討など、まだまだ詳細な検討を要することが多いがそれらについては今後の課題としたい。

以上の比較検討より、当遺跡で出土している遺物は鳥居本遺跡ＳＫ３、亀井遺跡ＳＫ１・２、橋垣内遺跡Ａ地区旧河道４、橋垣内遺跡Ｂ地区ＳＸ１などと併行する時期と考えられる。また、各遺構間においてもそう大きな時期差はないものと思われる。

Ｂ．奈良時代の遺物について

今回の調査で出土している奈良時代の遺物は、い

ずれも奈良時代後期でも新しい（８世紀の末）のものである。ＳＫ31とＳＫ24にまとまった遺物がある。いずれも磨滅が激しく、底部の調整方法は不明であるが、ＳＫ31出土の土師器杯Ａ（22）は、底部と口縁部の境が明瞭でないのに対し、ＳＫ24出土の土師器杯Ａのなかには（36）のように底部と口縁部の境が明瞭となるものや、口縁部が直線的に開く（37）、口縁部が外反し、端部のみ内弯する（33・34）など新しい要素がみられ、ＳＫ31出土遺物のほうが古いようである。これらの土器は肉眼でみる限りでは調整・色調・胎土が斎宮跡で出土するものと同じであり、斎宮の土師器編年[79]ではＳＫ1291の時期にあたる。また、ＳＫ24出土遺物は、斎宮跡第86次調査で長岡京の頃の時期とされているＳＫ6030・6070出土遺物の特徴と同じ平安時代的な新しい要素を持つものである[80]。

Ｃ．平安時代の遺物について

平安時代の遺物はＳＥ28から良好な資料が出土している。出土遺物は井戸枠掘形の遺物・井戸枠内の遺物・井戸枠検出前の遺物に分かれ、次の３時期に区分される。

井戸枠掘形から出土する遺物は、灰釉陶器が東山72号窯併行期のもので10世紀後半から11世紀初めの時期と考えられる[81]。また、この時期の土師器甕は、体部の肩に張りがあり、調整方法も体部外面は縦方向のハケメ調整を施し、内面にも横方向のハケメ調整を施すものがみられる。

井戸枠内から出土する遺物は、灰釉陶器が百代寺窯併行期のもので11世紀中頃から末の時期と考えられる。この時期の土師器小皿には、断面弓状で口縁部が肥厚するＡdが現れ、土師器甕も体部の張りがなくなり、頸部からすんなりと丸く。また、内面に横方向のハケメ調整を施すものはみられず、外面のハケメ調整を施さないものも現れる。

井戸枠検出前の遺物は、灰釉陶器が百代寺窯併行期のもので11世紀中頃から末の時期と考えられる。しかし、土師器小皿・椀は断面弓状で口縁部が肥厚するＡdが主となり、土師器甕もハケメ調整の見られないものが一般的となり、井戸枠内出土遺物よりも新しいと考えられる。

これらの土師器は、奈良時代の土師器同様に斎宮跡で出土するものと同じであり、斎宮の土師器編年では後Ⅰ期と後Ⅱ期にあたる。斎宮跡ではこの時期には所謂ロクロ土師器が多数出土しているが、ＳＥ28出土遺物では、僅かに台付小皿が１点出土しているのみであり、ロクロ土師器の分布には地域差がみられるようである。

Ｄ．室町時代の遺物について

室町時代の遺物は15世紀代から16世紀代の土師器・陶磁器が出土している。特にＳＤ20からは藤澤氏の古瀬戸後期様式編年[82]の後Ⅳ期（新）の時期（15世紀末）のまとまった遺物が出土している。この他ＳＫ36と柱穴（Ｍ２－Ｐ４）出土遺物も同時期である。また、16世紀に入るものでは、ＳＤ38とＳＥ13からは藤澤氏の大窯編年の[83]Ⅱ期、ＳＫ21からはⅢ期にあたる陶器が出土している。

３．まとめ

今回の調査は道路買収用地部分のみで限られた調査ではあったが多くの成果が得られた。

まず、弥生時代中期後葉には確実に方形周溝墓の墓制がこの地域に導入されていることを明らかにしえた。また、遺物も畿内地域の影響を受けながらも伊勢湾西岸地方の特色を強く示しているものが確認された。また、奈良・平安時代の遺構は少ないが、遺物は、斎宮跡出土のものと同様の遺物が出土しており、ＳＥ28から出土した一括資料は、斎宮跡でも良好な資料の少ない10世紀末から11世紀末の時期のもので貴重な資料といえよう。更に、室町時代以降のものとしては、ＳＤ20から出土した資料は溝出土のものであるが、単一の時期のまとまった遺物で良好な資料といえよう。

〔註〕

① 奥義次・大西素行・御村精治『上地山遺跡発掘調査報告』1985年　玉城町教育委員会
② 皇学館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』　1982年
③ 註②　文献に同じ
④ 奥義次「三重県の遺跡」『日本の旧石器文化３』1976年
⑤ 奥義次「第二章参考資料－宮川流域周辺の先史遺跡と遺物－」『大宮町史歴史編』1987年　大宮町
⑥ 上村安生『上の山遺跡発掘調査報告』1992年　三重埋蔵文化財センター
⑦ 岩中淳之『佐八藤波遺跡発掘調査報告』1990年　伊勢市教育委員会

⑧ 註⑥　文献に同じ
⑨ 小玉道明「度会郡玉城町仲垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1979年　三重県教育委員会
⑩ 註⑥、文献に同じ
⑪ a、小玉道明・長谷川博「度会郡玉城町月よべ遺跡」同上
b、御村精治・大西素行・山澤義貴・小玉道明『離宮院跡発掘調査報告』1980年　小俣町教育委員会
⑫ a、下村登良男「伊勢市上地町中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1973年　三重県教育委員会
b、下村登良男「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会
⑬ 倉田直純・東浩成『勝田遺跡発掘調査報告』1988年　三重県教育委員会
⑭ 註⑬　文献に同じ
⑮ a、下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』1986年　多気町教育委員会
b、前川嘉宏「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと』36号　1979年　三重大学歴史研究会
c、註②　文献に同じ
⑯ 註②　文献に同じ
⑰ 註⑮b　文献に同じ
⑱ 三重大学原始古代史部会「度会郡玉城町原6号・7号窯発掘略報」『ふびと』22号　1964年　三重大学歴史研究会
⑲ 註⑪b　文献に同じ
⑳ 瀬古吉久他「岩出の遺跡」『歩跡』3号　1976年　皇学館大学考古学研究会
㉑ 註⑫b　文献に同じ
㉒ 註⑥b　文献に同じ
㉓ 小玉道明「度会郡玉城町赤垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1979年　三重県教育委員会
㉔ 下村登良男「度会郡玉城町小ばし遺跡」同上
㉕ 伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」『近畿自動車道勢和～多気埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』　1991年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㉖ 小坂宜広・稲本賢治・角谷泰弘・前川嘉宏「蚊山遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　1990年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㉗ 註⑥　文献に同じ
㉘ 『三重県の地名』日本歴史地名大系24　1983年
㉙ 石器の実測・トレースは久保勝正氏による。また、旧石器・縄文時代の遺物について数々の御教示を得た。
㉚ 註⑥　文献に同じ
㉛ 註⑪a　文献に同じ
㉜ 註⑫b　文献に同じ
㉝ 註⑫a　文献に同じ
㉞ 吉水康夫「大薮遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告書』1973年　三重県教育委員会
㉟ 河瀬信幸『一志郡一志町片野　片野遺跡発掘調査報告書』1985年　三重県教育委員会
㊱ 吉水康夫他『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要(高畑地区)』1987年　三重県教育委員会
㊲ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』1972年　三重県教育委員会
㊳ 吉水康夫他『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ(小野・四反畑・夜ノ堀地区)』1987年　三重県教育委員会
㊴ 田村陽一「花ノ木（山崎）遺跡、浅間山遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第1分冊1－』1989年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㊵ 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』　1971年　明和町教育委員会
㊶ 稲生進一・吉村利男『一志町小山　鳥居本遺跡発掘査報告』1975年　一志町教育委員会
㊷ 河北秀実『鳥居本遺跡』『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊10－』　1989年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
㊸ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報17』　1987年　三重県教育委員会
㊹ 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『斎宮跡調査事務所年報1987　史跡斎宮跡発掘調査概報』　1988年
㊺ 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報NO.7』　1983年
㊻ 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『斎宮跡調査事務所年報1981　史跡斎宮跡発掘調査概報』　1982年
㊼ 田村陽一他「多気郡明和町　金剛坂遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985年　三重県教育委員会
㊽ 石黒立人「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』NO.7　1987年　愛知考古学談話会
㊾ 谷本鋭次・山澤義貴「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　1970年　三重県教育委員会
㊿ 「上箕田遺跡」『平成3年度　三重県埋蔵文化財センター年報3』　1992年　三重県埋蔵文化財センター
51 倉田直純　『亀山市川崎町　地蔵僧遺跡発掘調査報告』1978年　亀山市教育委員会
52 註㊽　文献に同じ
53 河瀬信幸「戸木遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第3分冊5－』　1991年　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター
54 西垣晴次「榛木文書（鏑矢伊勢日記）」『東京学芸大学付属高校研究紀要Ⅳ・Ⅴ』1966年　小林秀氏の御教示による
55 伊藤久嗣『納所遺跡－遺構と遺物－』　1980年　三重県教育委員会
56 伊藤克幸「安芸郡安濃村辻の内遺跡－付－北端遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1976年　安濃村遺跡調査会　安濃村教育委員会
57 福田昭　『涌早崎遺跡発掘調査報告書』　1992年　松阪市教育委員会
58 兼康保明「近江地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』1990年　寺沢薫・森岡秀人編
59 大橋信弥・山崎秀二『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　1986年　滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
60 深井明比古・岡野慶隆他『栄根遺跡』　1982年　兵庫県教育委員会
61 寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』1989年　寺沢薫・森岡秀人編
62 吉村利男『津市半田上村遺跡発掘調査報告』　1972年　津市

教育委員会
⑥③ 山田猛・梅沢裕「北瀬古・山城（二次）・大鼻遺跡」『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 1986年 三重県教育委員会
⑥④ 谷本鋭次「津市河辺町亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1973年 三重県教育委員会
⑥⑤ 森川幸雄・油田秀紀「橋垣内遺跡－Ｂ地区－」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 1990年 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
⑥⑥ 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成本編２』小林行雄・杉原荘介編 1968年
⑥⑦ 小玉道明・伊藤洋他『永井遺跡発掘調査報告』 1973年 四日市市教育委員会
⑥⑧ 春日井恒・花井千幸『上野遺跡』1991年 四日市市遺跡調査会
⑥⑨ 森川幸雄・近藤健「橋垣内遺跡－Ａ地区－」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 1991年 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
⑦⓪ 森田克之「摂津地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』 1990年 寺沢薫・森岡秀人編
⑦① 藤田三郎・松本洋明「大和地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』1989年 寺沢薫・森岡秀人編
⑦② 註⑥⓪ 文献に同じ
⑦③ 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』 1990年 寺沢薫・森岡秀人編
⑦④ 藤田三郎編「昭和60年度唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要４』 1986年 田原本町教育委員会
⑦⑤ 中村信裕「辻垣内遺跡Ｅ地区」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1983年 三重県教育委員会
⑦⑥ 仁保晋作『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1989年 三重県教育委員会
⑦⑦ 門田了三『名張市夏見下川原遺跡』名張市教育委員会
⑦⑧ 増田安生「各都道府県の動向－三重県」『日本考古学年報38』 1987年 日本考古学協会
⑦⑨ 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡発掘調査概報』 1985年
⑧⓪ 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成２年度発掘調査概報』1991年
⑧① 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相－瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』 1984年 瀬戸市歴史民俗資料館
⑧② 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』1991年 瀬戸市歴史民俗資料館
⑧③ 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 1986年 瀬戸市歴史民俗資料館

ＳＢ	規　模	棟方向	桁　行 (m)	梁　行 (m)	柱　間　寸　法（m） 桁　行	柱　間　寸　法（m） 梁　行	時　期	備　考
４２	４×２	Ｅ32°Ｓ	8.78	4.69	2.27＋2.12＋2.12＋2.27	2.27＋2.42	15c末～16c	ＳＢ44より新
４３	３×２	Ｅ23°Ｓ	5.46	3.64	1.82＋1.82＋1.82	1.82＋1.82	〃	ＳＢ44より新
４４	４×２	Ｅ32°Ｓ	8.18	4.69	1.97＋1.97＋1.97＋2.27	2.42＋2.27	〃	
４６	(3)×１	Ｅ25°Ｓ	—	3.48	?＋2.12＋2.42	3.48	〃	
４７	(2)×３	Ｅ27°Ｓ	—	5.46	?＋1.82	1.82+1.82+1.82	〃	
４８	(2)×２	Ｅ27°Ｓ	—	3.79	?＋1.82	1.97＋1.82	〃	
４９	３×２	Ｅ30°Ｓ	6.06	4.09	2.12＋1.97＋1.97	2.12＋1.97	〃	
５０	４×２	Ｅ32°Ｓ	7.58	4.39	1.82＋2.12＋1.82＋1.82	2.42＋1.97	〃	
５１	(3)×３	Ｅ27°Ｓ	—	7.27	?＋1.97＋1.82	2.73+2.42+2.12	〃	
ＳＡ								
４５	２×－	Ｅ32°Ｓ	3.94	－	1.97＋1.97	—	〃	

第１表　掘立柱建物・塀規模一覧表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
1	13-1	弥生・壷Aa	G3・S×1	8.8	4.6	16.0	外:上半縦方向のヘラミガキ、下半横方向のヘラミガキ 内:ナデ	並・1～2mm大の砂粒含	良	淡黄灰色	100	
2	3-1	〃・壷Bb	E1・S×1	-	-	-	外:櫛描き直線文・簾状文 内:ナデ	やや密・〃	〃	にぶい橙色	30	
3	4-1	〃・壷C	E1・S×1	15.7	16.8	34.8	外:櫛描き簾状文・列点文・波状文 内:ナデ	〃	〃	にぶい黄橙色	100	
4	13-2	〃・壷D	G4・S×1	-	4.6	-	外:ナデ、残りが悪く不鮮明 内:ナデ	粗・〃	〃	淡黄灰白色	頸部欠	
5	2-1	〃・蓋	E3・S×1	21.4	-	5.2	外:ヘラミガキ・ヨコナデ 内:不明	粗・〃	〃	浅黄橙色	60	
6	1-1	〃・甕A	E3・S×1	19.0	-	-	外:縦方向のハケメ残存不鮮明 内:不明	粗・〃	〃	にぶい黄橙色	70	
7	2-2	〃・甕B	F3・S×1	17.3	-	-	外:縦方向のハケメ残存不鮮明 内:不明	粗・〃	〃	浅黄橙色	20	
8	17-1	〃・壷Ba	E5・S×2	11.0	-	-	外:不明 内:不明	やや粗・〃	〃	にぶい橙色	20	
9	11-3	〃・壷Bb	H7・S×3	6.2	4.7	20.8	外:上半櫛描き簾状文・直線文・波状文、下半ナデ 内:ナデ	〃	〃	橙色	90	
10	12-1	〃・壷Ab	H7・S×3	10.0	-	-	外:櫛描き簾状文・直線文・波状文、下半ヘラミガキ 内:ヘラケズリ・ナデ	〃	〃	外:淡黄色 内:黄灰色	90	
11	12-3	〃・柱状の脚台部	H7・S×3	-	9.8	-	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ	粗・〃	〃	にぶい橙色	50	
12	16-1	〃・壷Ba	J4・SK41	13.2	-	-	外:縦方向のハケメ 内:不明	やや粗・〃	〃	外:にぶい黄橙色 内:褐灰色	30	黒斑あり
13	18-1	〃・壷Ba	J4・SK41	13.2	-	-	外:縦方向のハケメ、横方向のハケメ 内:縦方向のハケメ	〃	〃	にぶい黄橙色	30	
14	17-2	〃・壷Bb	J4・SK41	8.2	-	-	外:櫛描き刺突文・簾状文 内:不明	〃	〃	〃	口縁部のみ50	
15	3-2	〃・壷Ba	J6・SK32	11.8	-	-	外:不明 内:不明	粗・〃	〃	橙色	口縁部のみ20	
16	3-3	〃・壷Ba	J6・SK32	-	7.2	-	外:不明 内:不明	〃	〃	にぶい橙色	底部のみ60	(15) と同一個体
17	10-4	〃・壷C	K6・包	-	14.4	-	外:ナデ、凹線文5条 内:ナデ	やや密・〃	〃	浅黄橙色	脚部のみ25	
18	9-1	〃・壷E	K6・包	-	-	-	外:不明 内:ハケメ	〃	〃	外:にぶい黄橙色 内:橙色	30	
19	104-2	石器・ナイフ形石器	J6・包				現存で長さ3.7、幅1.55、厚さ0.75(cm)					石質チャート
20	104-1	石器・ナイフ形石器	J7・包				現存で長さ3.4、幅1.25、厚さ0.8(cm)					石質チャート
21	104-3	石器・石鏃	L6・SH34				現存で長さ1.45、幅1.45、厚さ0.2(cm)					石質サヌカイト
22	5-4	土師器・杯A	J4・SK31	14.8	8.0	3.5	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ、暗文あり	密	良	橙色	25	
23	5-2	〃・皿Aa	J6・SK31	15.7	9.0	2.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	30	
24	7-1	〃・皿Aa	J6・SK31	18.2	13.6	2.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	〃	〃	15	
25	5-3	〃・皿Aa	J6・SK31	17.0	11.0	2.2	外:ヨコナデ 外:ヨコナデ	〃	〃	〃	20	
26	7-3	〃・皿Ab	J6・SK31	18.0	12.0	2.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	密	〃	〃	10	
27	7-2	〃・皿Ab	J6・SK31	21.0	14.2	3.5	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ、暗文あり	〃	〃	〃	15	
28	8-1	〃・甕	J6・SK31	30.0	-	-	外:縦方向のハケメ、ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	〃	〃	口縁部のみ20	ハケメ 4～5本／1cm
29	7-5	〃・甕	J6・SK31	17.5	-	-	外:ヨコナデ、体部不明 内:横方向のハケメ、ヨコナデ	やや粗	〃	外:橙色 内:にぶい褐色	口縁部のみ25	ハケメ 5～6本／1cm
30	8-2	〃・鍋	J6・SK31	40.2	-	-	外:縦方向のハケメ、ヨコナデ 内:ヨコナデ、体部不明	〃	〃	浅黄橙色	口縁部のみ10	ハケメ 4本／1.2cm
31	7-4	須恵器・杯蓋	J6・SK31	14.2	-	-	外:ロクロナデ、ロクロヘラケズリ 内:ロクロナデ	密	〃	灰色	20	
32	15-2	〃・高杯	H6・SK27	-	9.2	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	淡青白色	脚部のみ	
33	6-4	土師器・杯A	H6・SK24	11.0	7.0	2.3	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	橙色	15	
34	14-4	〃・杯A	H6・SK24	13.0	8.6	3.0	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	70	
35	6-3	〃・杯A	H6・SK24	16.0	11.2	4.2	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	〃	〃	40	
36	14-5	〃・杯A	H6・SK24	14.0	10.6	2.8	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	20	
37	14-3	〃・杯A	H6・SK24	13.6	8.4	3.1	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	浅黄橙色	20	
38	6-2	〃・杯A	H6・SK24	12.0	6.8	3.3	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	橙	30	
39	6-6	〃・杯B	H6・SK24	15.0	11.0	3.0	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	30	
40	6-5	〃・皿Aa	H6・SK24	17.6	11.0	2.7	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	20	
41	6-1	〃・甕	H6・SK24	14.4	-	-	外:縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:横方向のハケメ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	浅黄橙	20	ハケメ 5本／1cm

第2表　出土遺物観察表（1）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考
42	14-2	土師器・甕	H6・SK24	22.0	-	-	外:縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:横方向のハケメ、口縁部ヨコナデ	良	良	浅黄橙	20	ハケメ 6本／1cm
43	15-3	土錘	H6・SK24	-	-	-	オサエ・ナデ	〃	〃	にぶい橙色	100	土師質、4.96g
44	52-1	土師器・小皿Aa	I7・SE28	9.6	-	1.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普1～3mm大の砂粒含	〃	浅黄橙色	100	
45	54-2	〃 ・小皿Ab	I7・SE28	10.4	-	1.6	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	良	〃	灰色	50	
46	53-4	〃 ・小皿Ac	I7・SE28	10.8	-	2.3	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	100	
47	53-3	〃 ・小皿Aa	I7・SE28	10.8	-	2.6	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	にぶい黄橙色	80	
48	52-3	〃 ・小皿Ab	I7・SE28	12.2	-	3.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普1～2mm大の砂粒含	〃	灰黄褐色	100	
49	53-2	〃 ・皿Aa	I7・SE28	13.4	-	3.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	70	
50	53-6	〃 ・皿Aa	I7・SE28	12.8	-	2.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	50	
51	53-5	〃 ・皿Aa	I7・SE28	13.4	-	3.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄色	60	
52	53-7	〃 ・皿Ab	I7・SE28	13.6	-	3.6	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	良	〃	浅黄橙色	50	
53	52-5	〃 ・椀Aa	I7・SE28	15.6	-	4.7	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普1～2mm大の砂粒含	〃	灰白色	70	
54	53-1	〃 ・台付椀Aa	I7・SE28	14.4	6.6	5.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄橙色	50	
55	53-8	〃 ・台付椀Aa	I7・SE28	14.4	6.8	5.6	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄色	60	
56	54-1	〃 ・台付椀Aa	I7・SE28	14.4	7.2	5.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普2～3mm大の砂粒含	〃	〃	50	
57	52-2	〃 ・小皿B	I7・SE28	11.2	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	淡橙色	高台 一部欠	
58	69-1	〃 ・甕Aa	I7・SE28	24.4	-	-	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:板ナデ	良	〃	橙色	口縁部 のみ50	清郷型甕
59	63-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.2	-	18.8	外:上半縦方向のハケメ、下半横方向のヘラケズリ 内:上半横方向のハケメ、下半横方向のヘラケズリ	〃	〃	浅黄橙色	80	ハケメ 4～5本／1cm
60	72-3	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:横方向のハケメ	普1mmの砂粒含	〃	〃	40	ハケメ 8～9本／1cm
61	70-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.4	-	-	外:縦方向のハケメ 内:横方向のハケメ	〃	〃	淡黄色	口縁部 のみ15	ハケメ 7本／1cm
62	71-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	24.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:横方向のハケメ	〃	〃	淡黄橙色	口縁部 のみ30	ハケメ 10本／1cm
63	70-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	〃	口縁部 のみ50	ハケメ 5本／1cm
64	73-3	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	35	ハケメ 11本／1cm
65	72-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	17.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	25	ハケメ 6本／1cm
66	74-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:縦方向のハケメ・横方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	〃	50	ハケメ 6本／1cm
67	73-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	〃	35	ハケメ 3本／1cm
68	69-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	25.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	にぶい橙色	口縁部 のみ15	ハケメ 5本／1cm
69	52-4	黒色土器・椀	I7・SE28	10.4	6.0	4.0	外:ナデ、ヨコナデ 内:粗いミガキ	良	〃	褐灰色	90	黒色土器A類
70	54-3	〃 ・椀	I7・SE28	14.4	7.6	5.3	外:ナデ、ヨコナデ 内:粗いミガキ	〃	〃	外:褐灰色 内:黒褐色	40	〃
71	52-6	〃 ・椀	I7・SE28	15.0	7.8	6.4	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ不明	〃	〃	黒褐色	90	〃
72	43-3	陶器・皿	I7・SE28	-	8.0	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	普1～4mm大の砂粒含	〃	灰白色	底部 のみ80	灰釉陶器
73	41-2	〃 ・椀	I7・SE28	-	8.0	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	良	〃	〃	40	〃
74	41-1	〃 ・椀	I7・SE28	-	7.6	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	〃	50	〃
75	41-3	〃 ・椀	I7・SE28	15.0	8.2	7.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰褐色	70	〃
76	47-1	土師器・小皿Ad	I7・SE28	10.4	-	2.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普細砂粒多く含	〃	灰白色	100	
77	47-2	〃 ・小皿Aa	I7・SE28	10.8	-	2.3	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	80	
78	47-3	〃 ・小皿Aa	I7・SE28	11.0	-	2.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	100	
79	47-4	〃 ・小皿Ab	I7・SE28	11.4	-	2.3	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	70	
80	47-6	〃 ・皿Ac	I7・SE28	13.4	-	3.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	100	
81	47-5	〃 ・皿Aa	I7・SE28	13.6	-	3.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	70	
82	47-7	〃 ・台付椀Ac	I7・SE28	14.0	7.0	5.4	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	80	

第3表　出土遺物観察表（2）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考
83	47-8	〃 ・台付椀Ab	I7・SE28	15.0	6.6	5.5	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普細砂粒 多く含	良	灰白色	50	
84	78-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	12.4	-	12.2	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	良	〃	〃	90	ハケメ 7～8本／1cm
85	77-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	普1～3mm大の 砂粒含	〃	淡黄色	口縁部 のみ40	
86	76-3	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	〃	〃	にぶい橙色	口縁部 のみ20	
87	76-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.8	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	口縁部 のみ40	ハケメ 10本／1cm
88	78-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	16.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	浅黄色	40	ハケメ 8本／1cm
89	75-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	26.4	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	口縁部 のみ100	ハケメ 8～9本／1cm
90	77-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	23.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	にぶい橙色	口縁部 のみ20	ハケメ 7本／1cm
91	76-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	26.0	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	にぶい橙色	口縁部 のみ30	ハケメ 10本／1cm
92	55-1	黒色土器・椀	I7・SE28	-	8.8	-	外:ナデ 内:ミガキ不鮮明	良	〃	外:黄灰褐色 内:黒褐色	底部 のみ100	黒色土器A類
93	55-2	〃 ・椀	I7・SE28	11.0	4.8	4.7	外:ナデ 内:粗いミガキ	〃	〃	外:灰黄褐色 内:黒褐色	30	〃
94	55-3	〃 ・椀	I7・SE28	13.0	4.9	7.2	外:ミガキ、ナデ 内:ミガキ不明	〃	〃	〃	30	〃
95	43-5	陶器・椀	I7・SE28	-	6.6	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰白色	底部 のみ50	灰釉陶器
96	44-3	〃 ・広口瓶	I7・SE28	22.0	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	〃	口縁部 のみ40	〃
97	49-4	土師器・小皿Ad	I7・SE28	10.0	-	1.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	70	
98	50-4	〃 ・小皿Ad	I7・SE28	10.4	-	2.1	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	50	
99	45-4	〃 ・小皿Ad	I7・SE28	10.0	-	2.1	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	80	
100	49-3	〃 ・小皿Ad	I7・SE28	10.0	-	2.1	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	75	
101	48-2	〃 ・小皿Aa	I7・SE28	10.2	-	1.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄色	95	
102	48-4	〃 ・小皿Ae	I7・SE28	10.9	-	2.3	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	70	
103	46-4	〃 ・小皿Ae	I7・SE28	10.6	-	2.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	95	
104	48-3	〃 ・小皿Ae	I7・SE28	10.0	-	2.5	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	95	
105	48-1	〃 ・小皿Ae	I7・SE28	10.4	-	2.5	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	100	
106	50-3	〃 ・皿Ab	I7・SE28	13.4	-	3.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	普1～3mm大の 砂粒含む	〃	浅黄橙色	75	
107	50-2	〃 ・皿Aa	I7・SE28	13.6	-	2.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	95	
108	49-2	〃 ・椀Aa	I7・SE28	15.2	-	4.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	50	
109	45-3	〃 ・椀Ab	I7・SE28	13.8	-	3.9	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	灰白色	40	
110	49-1	〃 ・椀Ab	I7・SE28	14.8	-	4.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	60	
111	46-3	〃 ・椀Ab	I7・SE28	14.8	-	4.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	95	
112	51-1	〃 ・台付椀Ac	I7・SE28	13.8	-	-	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	灰黄褐色	20	
113	46-2	〃 ・台付椀Ac	I7・SE28	-	7.6	-	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	底部 のみ100	
114	45-2	〃 ・台付椀Aa	I7・SE28	16.2	7.2	5.2	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	褐灰色	50	
115	50-1	〃 ・台付椀Ab	I7・SE28	14.7	6.6	5.7	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄色	95	
116	46-1	〃 ・台付椀Ab	I7・SE28	15.2	6.6	6.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	50	
117	67-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.0	-	17.0	外:上半オサエ・一部縦方向のハケメ、下半横方向のヘラケズリ内:上半ナデ、下半横方向のヘラケズリ	〃	〃	灰白色	90	
118	62-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.0	-	19.2	外:上半オサエ、下半横方向のヘラケズリ 内:上半横方向のハケメ、下半ナデ	〃	〃	〃	100	
119	68-1	〃 ・甕Ab	I7・SE28	15.8	-	-	外:不明 内:ナデ	〃	〃	〃	60	
120	65-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	14.4	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	30	
121	59-2	〃 ・甕Ab	I7・SE28	23.2	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	にぶい黄褐色	口縁部 のみ30	ハケメ 6本／1cm
122	60-3	〃 ・甕Ab	I7・SE28	27.2	-	-	外:縦方向のハケメ 内:ナデ	〃	〃	外:浅黄橙色 内:灰褐色	口縁部 のみ30	ハケメ 8～9本／1cm
123	61-1	〃 ・甕Ac	I7・SE28	23.2	-	-	外:ナデ 内:ナデ	〃	〃	浅黄橙色	口縁部 のみ20	

第4表　出土遺物観察表（3）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考
124	51-3	黒色土器・椀	I7・SE28	14.0	7.6	5.0	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ	普1～3mm大の砂粒含	良	外:浅黄橙 内:暗灰色	90	黒色土器A類
125	45-1	〃 ・椀	I7・SE28	15.0	8.0	6.8	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ	〃	〃	外:暗灰色 内:灰白色	90	〃
126	51-2	〃 ・椀	I7・SE28	16.0	-	-	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ	〃	〃	外:浅黄橙色 内:青黒色	45	〃
127	43-1	陶器・椀	I7・SE28	-	8.0	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰黄色	50	灰釉陶器
128	43-4	〃 ・椀	I7・SE28	-	7.0	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	〃	底部のみ100	〃
129	42-2	〃 ・椀	I7・SE28	14.7	7.0	4.9	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	〃	70	〃
130	42-1	〃 ・椀	I7・SE28	15.2	6.8	5.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰白色	40	〃
131	44-2	〃 ・椀	I7・SE28	15.8	7.2	6.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	浅黄色	40	〃
132	43-2	〃 ・水注	I7・SE28	-	7.8	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰白色	底部のみ50	〃
133	42-3	〃 ・広口瓶	I7・SE28	-	14.0	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	黄灰色	底部のみ50	〃
134	44-4	〃 ・広口瓶	I7・SE28	-	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰白色	口縁部のみ30	〃
135	99-3	土師器・皿	H5・SD20	7.2 ～8.3	-	2.0	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄褐色	90	
136	99-5	〃 ・皿	F5・SD20	7.0	-	1.5	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	30	
137	99-6	〃 ・皿	H5・SD20	7.4	-	1.6	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	90	
138	99-4	〃 ・皿	G5・SD20	7.0	-	1.5	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	20	
139	99-2	〃 ・皿	H5・SD20	6.3	-	0.8	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	60	
140	99-1	〃 ・皿	H5・SD20	7.0 ～7.6	-	1.0	外:オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	95	
141	97-1	〃 ・茶釜蓋	G5・SD20	12.4	-	1.9	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	密、細砂・雲母片含	〃	〃	95	
142	97-2	〃 ・茶釜	G5・SD20	9.4	-	-	外:縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	淡黄茶褐色	口縁のみ20	
143	100-1	〃 ・鍋	F5・SD20	28.4	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	口縁のみ20	
144	100-2	〃 ・鍋	H5・SD20	35.6	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	乳黄色	20	
145	101-1	〃 ・鍋	G5・SD20	32.6	-	-	外:ハケメのちオサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	90	
146	97-4	〃 ・羽釜	J5・SD20	23.2	-	-	外:横方向のち縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	15	
147	102	〃 ・羽釜	I5・SD20	36.0	-	-	外:ハケメ、底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄茶褐色	20	
148	96-2	〃 ・羽釜	G5・SD20	39.4	-	-	外:横方向のハケメのち縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	20	
149	103	〃 ・羽釜	F5・SD20	29.8	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	淡黄褐色	50	
150	92-1	陶器・皿	H5・SD20	9.8	4.4	2.1	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	〃	白黄褐色	80	緑釉小皿・ 釉色は淡緑色
151	92-3	〃 ・皿	G5・SD20	10.0	4.0	2.0	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	90	〃 ・ 〃
152	91-4	〃 ・皿	I5・SD20	11.4	-	2.9	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	60	〃 ・ 〃
153	91-2	〃 ・皿	H5・SD20	9.7	4.6	2.1	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	40	〃 ・ 〃
154	91-3	〃 ・皿	H5・SD20	8.2	3.8	2.0	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	口縁部60	施釉陶器小皿・ 釉色は淡茶色
155	91-5	〃 ・椀	G5・SD20	14.4	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	〃	口縁部のみ40	灰釉平椀・ 釉色は淡緑色
156	91-7	〃 ・椀	H5・SD20	-	4.2	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	底部のみ25	〃 ・ 〃
157	91-6	〃 ・椀	H5・SD20	-	4.9	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	80	〃 ・ 〃
158	91-1	〃 ・椀	H5・SD20	15.6	5.8	5.6	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	80	〃 ・ 〃
159	91-8	〃 ・茶椀	I5・SD20	12.2	-	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	灰白色	口縁部のみ40	天目茶椀・ 釉色は黒色
160	92-2	〃 ・茶椀	G5・SD20	12.2	4.4	6.3	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	黄白色	60	〃 ・ 〃
161	93-1	〃 ・鉢	J5・SD20	-	12.0	-	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	50	擂鉢・ 釉色は暗茶褐色
162	94-1	〃 ・鉢	G5・SD20	-	10.2	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡黄褐色	30	〃 ・ 釉色は暗紫色
163	95-1	〃 ・鉢	I5・SD20	-	11.0	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	10	〃 ・ 釉色は暗茶褐色
164	93-2	〃 ・鉢	G5・SD20	28.4	-	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	口縁部のみ15	〃 ・ 釉色は茶褐色

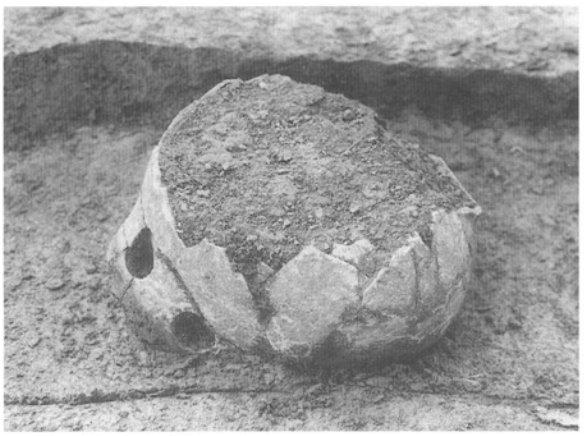
第5表　出土遺物観察表（4）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考
165	93-3	陶器・鉢	G5・SD20	34.0	-	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	良	淡黄褐色	口縁部のみ15	擂鉢・釉色は暗紫色
166	92-4	〃・深皿	G5・SD20	27.4	-	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	灰白色	口縁部のみ15	灰釉折縁深皿・釉色は淡緑色
167	81-6	土師器・皿	N5・SK36	7.0	-	1.0	外:オサエ 内:ナデ	〃	〃	乳白色	50	
168	81-7	〃・皿	N5・SK36	7.0	-	1.4	外:オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄褐色	40	
169	82-4	〃・鍋	O6・SK36	28.0	-	-	外:ナデのちヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	密細砂含	〃	〃	30	
170	90-1	〃・羽釜	O5・SK36	25.4	-	-	外:ナデのち横方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	20	
171	81-2	陶器・皿	N6・SK36	10.0	-	2.1	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	〃	黄褐色	20	縁釉小皿・釉色は暗茶色
172	81-3	〃・皿	N6・SK36	11.2	-	2.1	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡黄褐色	20	〃・〃
173	81-4	〃・皿	O5・SK36	11.0	-	2.1	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	黄褐色	20	腰折れ皿・釉色は淡緑色
174	82-1	〃・皿	O6・SK36	-	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰色	15	卸皿
175	80-1	〃・甕	N5・SK36	27.0	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	〃	〃	灰茶色	30	暗赤褐色の釉
176	89-2	石・五輪塔	F6・SD23									空風輪・石質は砂岩
177	87-7	磁器・椀	G5・SD23	-	6.4	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	良	灰色	90	青磁椀・釉色は白緑色
178	89-1	土師器・羽釜	G5・SD23	16.8	-	-	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	密1～2mm大の砂粒含	〃	黄褐色	口縁部のみ20	
179	88-2	陶器・鉢	O8・SD38	17.0	-	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	〃	黄橙褐色	口縁部のみ35	
180	88-4	〃・皿	P8・SD38	8.2	4.6	2.2	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡黄色	50	施釉陶器丸皿・釉色は淡緑色
181	87-3	〃・茶椀	N8・SD38	10.8	-	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡白黄色	40	天目茶椀・釉色は黒茶色
182	88-1	〃・鉢	O8・SD38	-	11.0	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡黄褐色	10	擂鉢・釉色は暗紫色
183	88-5	〃・皿	P8・SD38	13.0	-	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	灰白色	10	青磁稜花皿・釉色は淡緑色
184	86-2	土師器・不明	F8・SK21	-	-	-	外:ハケメ、ナデ 内:ナデのちケズリ	密細砂・雲母片含	〃	淡黄褐色	不明	
185	83-4	〃・鍋	F8・SK21	16.6	-	-	外:オサエ・ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	口縁部のみ20	
186	84-3	〃・鍋	F8・SK21	34.8	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	淡灰黄褐色	口縁部のみ20	
187	84-2	〃・鍋	F8・SK21	38.0	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡黄褐色	口縁部のみ35	
188	85-1	陶器・茶椀	F7・SK21	12.8	-	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	〃	白黄色	30	天目茶椀・釉色は黒茶色
189	81-5	〃・皿	K2・SE13	9.0	5.8	2.4	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	灰色	40	施釉陶器丸皿・釉色は淡緑色
190	87-2	土師器・鍋	F4・SD12	17.0	-	-	外:オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	密1～2mm大の砂粒含	〃	淡黄褐色	口縁部のみ20	
191	82-2	〃・鍋	F4・SK4	28.0	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	口縁部のみ10	
192	82-8	〃・不明	G4・SK4	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	不明	
193	83-1	〃・皿	H3・SK9	8.4	-	1.5	外:オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	〃	口縁部のみ25	
194	83-2	〃・茶釜蓋	H3・SK9	11.8	-	1.6	外:オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	〃	〃	淡橙褐色	口縁部のみ10	
195	2-3	〃・茶釜蓋	H3・SK9	15.5	-	2.1	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	淡黄灰褐色	20	
196	83-3	〃・茶釜	H3・SK9	10.0	-	-	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	口縁部のみ15	
197	2-4	〃・羽釜	H3・SK9	42.6	-	-	外:オサエののちナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	黄褐色	口縁部のみ20	
198	87-1	磁器・椀	N2・SD19	-	5.6	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	〃	灰白色	底部のみ90	青磁椀・釉色は淡緑色
199	11-1	〃・皿	H3・整地層	14.6	3.1	6.2	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	〃	50	青磁稜花皿・釉色は淡緑色
200	10-3	〃・椀	I2・整地層	-	4.6	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	白灰色	底部のみ10	青磁椀・釉色は淡緑色
201	10-1	土師器・皿	M2・P4	7.6	-	1.6	外:オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	密1～2mm大の砂粒含	〃	淡橙褐色	60	
202	79-1	〃・椀	M2・P4	7.5	5.0	3.6	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	〃	淡黄褐色	60	小椀
203	9-2	陶器・茶椀	M2・P4	12.6	-	-	外:ロクロナデのちケズリのち釉 内:ロクロナデのち釉	密	〃	白黄色	口縁部のみ20	天目茶椀・釉色は黒茶色
204	9-3	〃・鉢	M2・P4	-	9.0	-	外:ロクロナデのち釉 内:ロクロナデのち釉	〃	〃	淡黄褐色	10	擂鉢・釉色は暗紫色

第6表　出土遺物観察表（5）

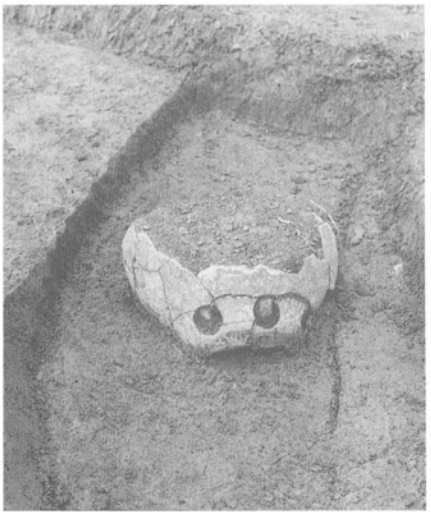
遺跡全景　西上空から

ＳＸ１　南から



ＳＸ１遺物出土状況　北から

ＳＸ３遺物出土状況　西から

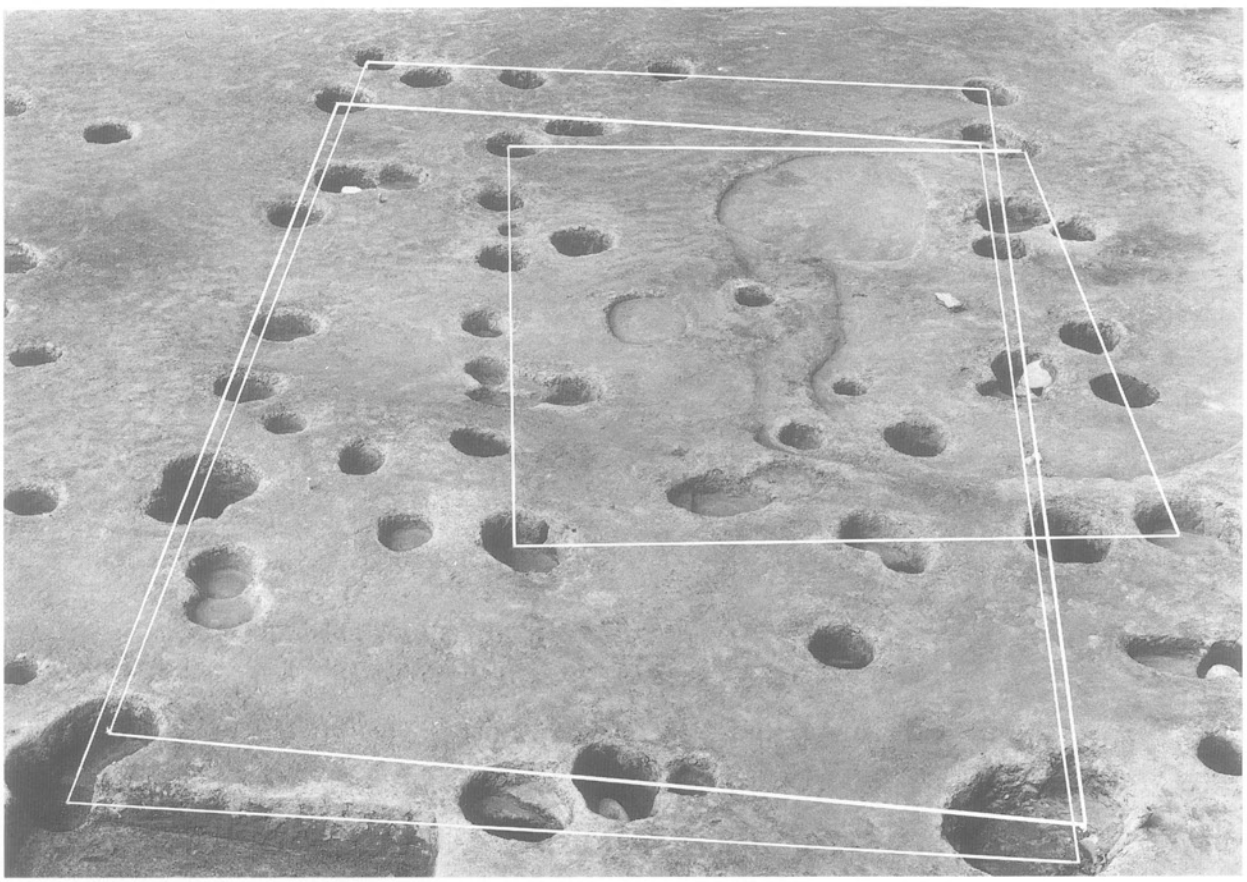


ＳＸ１遺物出土状況　東から

ＳＥ28遺物出土状況　北から

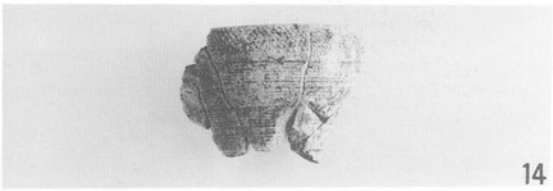
ＳＥ28　南西から

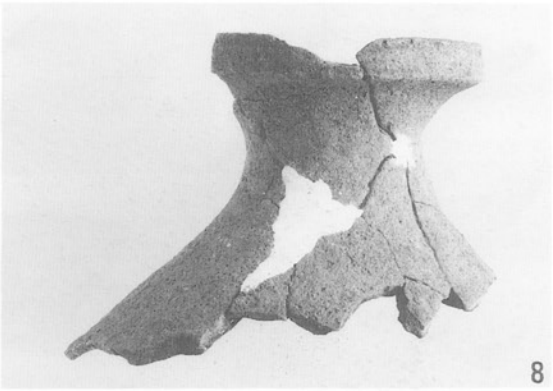
調査区南半景　北から

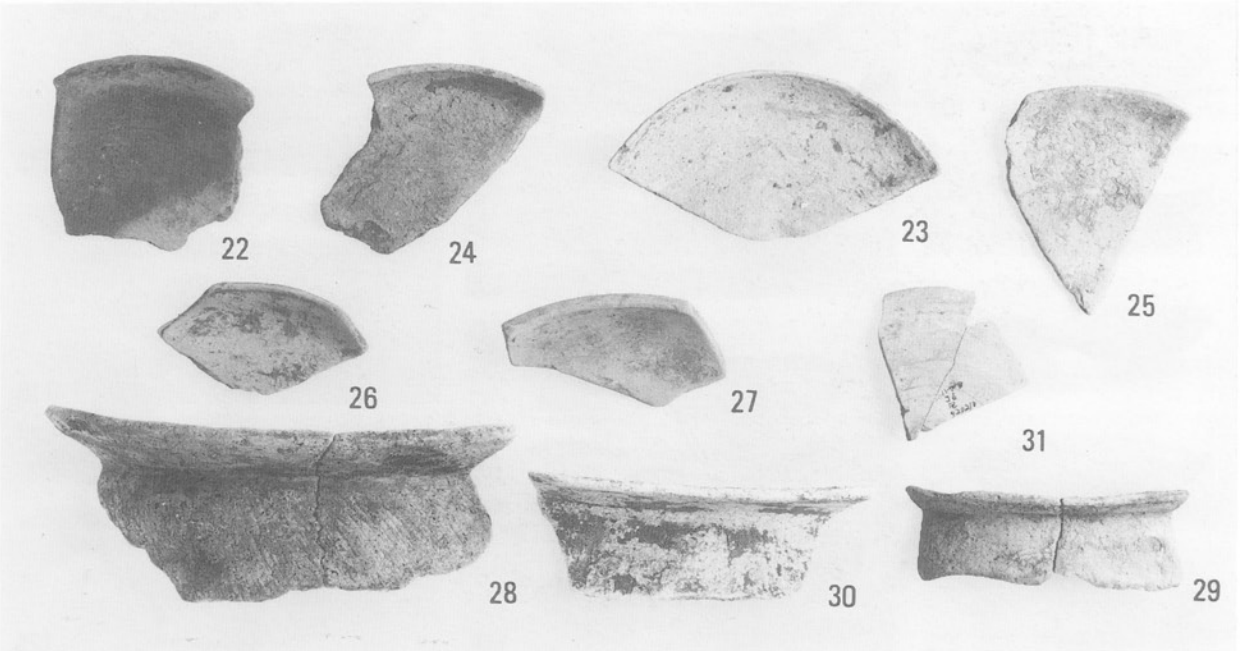


ＳＢ42・ＳＢ43・ＳＢ44　東から

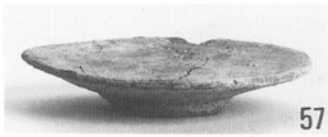
9・10－ＳＸ３出土遺物，３－ＳＸ１出土遺物（１：３）







19・20ー包含層出土遺物、21ーＳＨ34出土遺物、1ーＳＸ１出土遺物、14ーＳＫ41出土遺物、８ーＳＸ２出土遺物、
22～31ーＳＫ31出土遺物　19～21（１：１）他は（１：３）


57

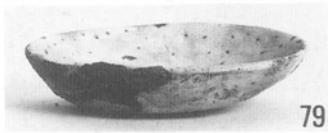
44

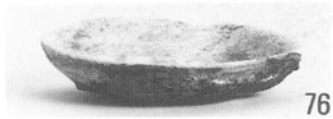
47

46

77

78


79


76

101

97

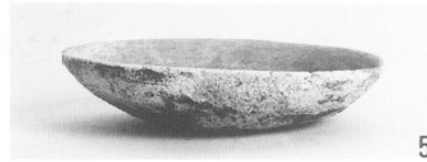
99

100

103

48

51


50

49

52

69

81

106

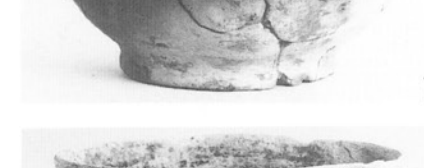
107

111

53

54

71


82

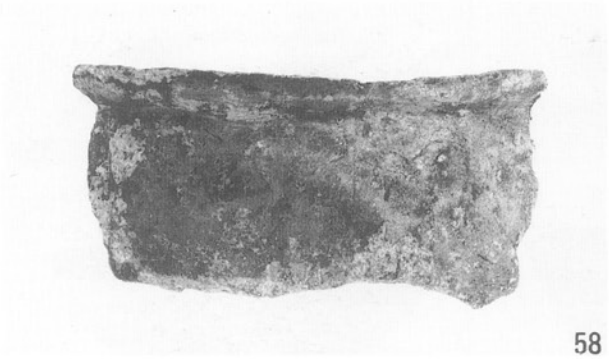
83

115

116

125

ＳＥ28出土遺物（１：３）


58

75

129

130

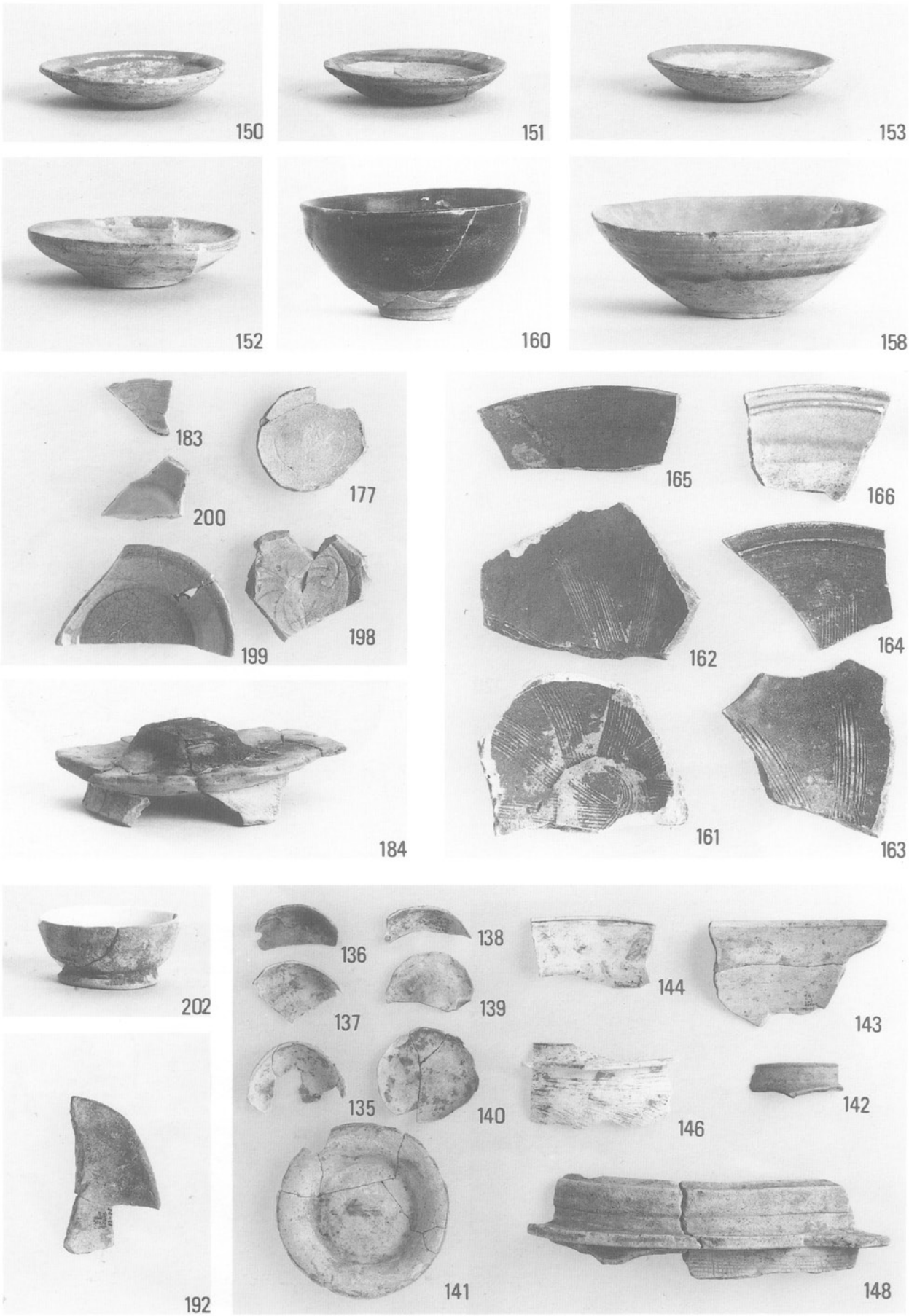
117

84

119

118

ＳＥ28出土遺物（１：３）



135～144・146・148・150～153・158・160～166－ＳＤ20出土遺物、177－ＳＤ23出土遺物、183－ＳＤ38出土遺物、
198－ＳＤ19出土遺物、199・200－整地層出土遺物、184－ＳＫ21出土遺物、192－ＳＫ４出土遺物、202－Ｍ２Ｐ４出土遺物
150～153・158・160・184・192・202（１：３）他は（１：４）

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１０４

一般県道田丸停車場斎明線道路改良事業に伴う

波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告

―度会郡玉城町下田辺―

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　東海印刷株式会社